
怪しき会社

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪しき会社

【Nコード】

N0385B

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

一生懸命仕事している主人公『僕』の前に昔色々と揉めたお客が現われる。再度取引が始まるがそれはこれから始まる壮大な追走劇の序章にすぎなかった。スリリングな展開に読むものを惹き付ける真実の話。脅威の敵を前に奮闘する主人公の活躍をリアルタイムに進行。これは実話です。

巻き込まれ編 その1（前書き）

これは、本当の話です。

僕が仕事中に巻き込まれた話です。

初めは普通の仕事上の不満などに読めるでしょう。

それが・・・だんだんと・・・ありえない展開へと発展していきます。

そんな中奮闘する主人公の僕を是非応援してください。

巻き込まれ編 その1

今日はお客様の所へ後輩が営業して、話を聞いてくれるそうなんです。僕も同行します。

ちょっと遠い所で正直面倒です。

そもそも、何故僕が後輩と一緒にお客の所に行くことになったのかというところ。

初めは、まだまだ未熟で不安な使い物にならない後輩をしっかりと僕の世界最高峰級の営業でフォローせよ！

…という命令だと思ってました。

実際はそうではなくて。

なんと僕をご指名なんです。

既に怪しいですよ、この時点で。

過去のお客を思い浮かべる。

そっち方面で僕のこと知ってるお客は…。

…一件…いた。

非常に…やり難かったお客が…。

お金のことで揉めて、回収に1年半かかったお客がいる。

だが・住所が違う。

そこではないだろう。

回収するためにキツイことも言った、失礼なことも言った。

ホント取り立て屋に成ったのかと自分でも錯覚したくらい。

普通そういうことがあったら、2度と会いたくないと思うし、僕

も関わりあいたくないです。
とても気まずいですし。

きっと、別のお客が場所を変われたんだ。
そう思おう。それしかない。

使い物にならない後輩はお客の名前すら聞いてない。
それ営業じゃないやん。

社名のみ。社名も初めて聞く。

運転の下手な後輩と現地へ。

ブレーキ踏むのが非常に遅いので、寝るのが恐い。
寝ている間にこの世とお別れしそうで、全く眠れず！

到着。

うーん、やっぱり思い出せない。

入口へ。

後輩が「どうも、お世話になります」
お世話になるのはこれからだ。

向こうから「おーうう」

聞き覚えある声。

まっまさか！！

見たことのある男性が顔を出した。

こっこいつは！！

その！例の！最初に話した！

あの！揉めた！回収に！1年半かった！

あの人ではないか！！

がびーん！！！！

会社名も変え・・場所も変え・・なんてタイミングで営業をしたんだ。

あの・・使えない後輩め！！

はつきり言って呼ばれたくはなかった。

関わりあいたくなかった。

「実はのーこういう話があるんや」

後輩の話は無視していきなり切り出す。

「是非おまえんとこでやってもらいたいんや」

はあ・・あの・・その・・それはいいのですが。

仕事の話はいいのですが。

問題はお金のことですよ。

アンタ・・払えんの？

それに、後輩の持ってきた話はどうなってんの？

単に呼び出したかっただけですか？

僕の中ではお断りの判断を出していますが、一応会社に持ち帰って相談することに。

状況を何にも知らない後輩は「すごいですね！これはデカイ話になりますよ！」と大喜び。

お前・・知らないのなら無理もないが。

回収をしなくてもいいのなら、仕事取りに行くけど・・僕に責任くるなら・・・。

お断りします!!!!!!

前払い一括なら受けてもいいけど。
やはり怪しい所であった。

つづく

巻き込まれ編 その2

僕に直接電話あります。

「どうなった？あの件どうなった？」

おいおい。

担当は僕じゃないのですが。

そんなストーリーカーのようなこと止めてもらえますか？

止めろ！

今まではこっちから電話しても一切出なかったくせに。

何もかも元に戻ると、怒涛のようなこの電話攻撃はなんでしょう
か。

思いつきり繋がるじゃん。

今までずっと確信犯で電話に出なかったことがバレバレやん。

会社は思った通り、一括の前払いであれば受けるとの判断。

僕は正直嫌です。

やりたくありません。

とにかくもうほっといってください！

「おい！一括でしかも前払いじゃないとやらんぞ！！こら！」

…とそのことを伝えにまた行かなくてはなりません。

結構遠いんだよね。

電話で済ませてやろうかと思ったけど、さすがに失礼だと。

文句を言いながらもちゃんとお客の気持ちを考える、それがこの

エリート営業マンの僕です。
使えない後輩とは100味違う。

後輩には状況をちゃんと話したのですが、痛い目にあわないとわからないのでしよう。

「それでも・・・僕は仕事欲しいです!!」

：と、ドラマを意識しているのか、かっこええことを上司に言うてのけました。

結局そのままフォロー役の僕が巻き込まれることになったのです。

この・・・!

思いつきで言いやがって。

真剣に欲しいとか言ったくせに、「この資料面倒だから、修正なしでお客様に提出してもいいですかね?」

などとボケたことを言い放つ。

お客様に失礼だろ!この馬鹿!!馬鹿!!

あゝ!!馬鹿!!

勝手にしろ!

僕は「俺はどうかと思うけど好きにすれば?」

と後輩を突き放しました。

怒られて勉強するものです。

この場合、僕も一緒に怒られることになりますが。

僕としてはあの条件で向こうがOKするとは思えません。

頼める会社は他にもあります。

そういうことがあるから、僕も別に怒らせてもいいやと覚悟しているのです。

また・行くことになります。
実はとても不安な僕です。

つづく

巻き込まれ編 その3

さて・・・今日はいよいよ現場へ。

相変わらず後輩の運転はブレーキ踏むの遅い！！

眠れないんだよ！

寝かせてくれよ！

この下手くそ！

お前あれか！？

過去に事故しまくりだろう！

この下手くそ！

え？したことない？

あ、そう。

でも下手くそなんだからね！

この下手くそ！

ホント運転が下手な人は何か嫌ですよね。

僕なんか、人身事故・スピード違反で免許。

シートベルト・一時不停止・右折禁止・またスピード違反。

そして、ひたすら謝って許してもらった人身事故未遂。

こんなモンですよ。

いや…全く…って、僕も下手じゃあああゝん！！

はっ！いかん！ここでオチをつくってしまった！

メインはこれからですよ！これから！

ヤバイ、ヤバイ。

この話で終了していたよ。

そんなこんなで現地へ到着。

「前金一括」は誰が言うのですか？

後輩ですか？仕事欲しいんですよ？

僕はいいから。

仕事欲しい人間が言うんじゃないのですか？

何だその目は。

その何かい言いたそうな目はなんだ。

「アンタ先輩でしょ？アンタ言ってよ」（後輩心の叫び）

アンタ・・・って・・・

実際それを言うために今日同行したようなモンですから。
言うのはやはり僕ですね。

「おうおう」

いつもの声が聞こえた。

「どうや？どうなった？どうなった？」

僕の「台風すごかったですね」という時候の話をだしからへし
折られて。

結果だけを聞きたがる。

うーん。

言ったらなんか怒りそう。

嫌だな。恐いな。面倒だな。
最初からお断りしますって言おうかな。

覚悟を決めて言った。

「僕達は・・特に彼（後輩）は本当に今回仕事が欲しいです。でもですね。前回のことがありますから」

前回僕が1年半かかってお金を回収したのです。

「会社としてはですね。今回前金の一括ならば受けてもいいって言ってるんですよ」

さあ・・・怒るか？どうなる？

断れ！「じゃあもういい」って言え！言え！言ってしまえ！

言え！言え！言え！言え！

「そうか・・・」

言え！言え！言え！言え！

「・・・・・」

言え！言え！言え！言え！

「わかった・・それでいこう」

!!!!!!!!!!!!!!

・・・・・ああ！??。

いえーい！ひゃっほー！

「ありがとうございます!!! 頑張ります!!!!」

やったぜ! うへへへ! と心の中で叫んでいるのであろう。

後輩は待ってましたの如く頭を下げた。

僕は・・え・・マジでえ・?

後輩は僕の回収した1年半の苦しみを知らないからあんなに驚喜乱舞しているだろうな。

あの時の辛さはもう説明できないくらい大変だった。

それを経験しているから、今回の話もやりたくなかったのが本音です。

でもまあ前金で一括だし。

ちゃんとお金を頂いてから動けばいいか。

だが・・ドンデン返しは最後の最後に待っているもので。

世の中・・人生・・仕事ってホント面白いですね。

「じゃあそれで頼むわ。まだまだ仕事あるけんの。これだけじゃないぞ」

えええっ!!???

「これとな、あれとな、それとな、そうそうこういうのもあるぞ。頼むぞ」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

しっ!! しまったあ!!!! やられたあああ!!!!

今の話はOK! それは置いといて・

これから・この端もあの話もあるんだぞ! 頼むぞ。

うわああああ。

これはヤバイ! ヤバイぞ! ヤバイよ!

「〽今回前金の一括ならば」

ううう。さすが・海千山千・まんまとやられた。
前金を受けたということはこれからの仕事も請けざるを得ない。
そういう状況に持っていかれた。

一旦出直して、言い直さないと。

「〽最初のお仕事全て前金の一括ならば」
通るかな？微妙だな。

あああああああ。

やっぱり巻き込まれた。

だから断れば良かったんだよ！！
次回また同行確定じゃんか！！

それにしても気になることが。

どうして後輩は「すごい！すごい！仕事いっばいでますね！やっ
たあ！！」

なんて言うのだろうか・・・。

これは・・・この状況は・・・ヤバイっすよ。

つづく

巻き込まれ編 その4

まあ・・今回の一括貰ったら後の仕事は断ればいいやん。
卑怯？

別にいゝ。

いいじゃあああゝん。

とにかく出発だあ！

当日アポ。

実は僕19時に他に用件があったのです。
後輩にはできれば20時30分くらいがいいと言っていました。
そして帰ってきた返事。

「18時30分でアポとりました！！お願いします！！」

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

お・・・・・お前・・・。

いや。

貴様。

アホか！

アホ！

アホ！

アホ！

アホ！

このアホがあ！！

アホがアポをとるのにアホなやり方でアポを取って・・あゝ！も
う訳わかんない！！

スケジュールに追われる大物のような動き。
元々大物ですが。

さっさと話終わらせればいいんですよ。

「前金一括早くください。その後はその都度考えます。じゃ。」
こんな感じでいいんですよ。

現地到着。

なんと先方いない。

ええ！！おい！こら！

急いでんだよ！！

10分待たされて。

「おうー」

いつのもし。

「えーと。どうなったんだっけ。」

同じ話をさせんなよ。

「あの、前金一括はどうしたらしいですか？それがあって動きます
ので」

よっしゃ言ったぞ！

いきなり言ったぞ！

打ち合わせなんぞ知るか！！！！

他の仕事のこと？ああ後で後で。

「んー、じゃあ振り込み先を教えてください。明日振り込むわ」
マジっすか？

「あつ、はい。わかりました。それでは」
急いでいるので帰ります。

まずは振り込みが完璧にあってから動くということ。
他の仕事はその時で。

そういうことで話は付きました。

後は・・・そう。

最後の詰め。

振り込みがあることだけを祈るのみ。
本当にあるのか・・・あるのか・・・。

一夜明けて。

振り込み・・・。。。

ああああああ。

ありましたー！！！！！！！！！！

なんと・・・ホントに・・・。

これでもう逃げられない。

これからの動きはちゃんとやらないと。

立場が逆転。

それは・・・うん・・・ウハウハの後輩の仕事ですから。
ちゃんとやってよ。

そういえば・・・他の仕事のことの話してなかったなあ。

まっ
い
い
か。

いや終わりだ!!!

これから後輩の仕事ですから。

続きが・・・ないことを祈る。

つづく

暴走編 その1 (前書き)

いつの間にか自分か担当になった主人公「僕」
。 なんとか仕事を無くそうとしているところに後輩の間の手が・・・
救いがない暴走編の始まりです。

暴走編 その1

現在はその会社に対して後輩が動いています。

前金もらったんですから当然です。

もっと、もっと、早く動かないとね。

後輩の数字です。

良かったですね。

これからもよろしくお願いします。

同じ社内とはいえこの件は僕の手から離れつつあります。

それでいい。

それでいい。

個人的にはこんな仕事僕はいりませんから。

あの回収1年半の辛さが蘇る。

しかし。

今日後輩がそこへ行ってた時に、新しい仕事の話が出そうだと。

どうしたらいいかと。

僕は以前言ってたんですよ。

初年度は全て前金で！と。

どうしたらいいかと言う前に「前金で」って言えばいいじゃん！

僕に振るなよ。

こんな話。

一緒に同行して前金話も僕がしたのだから・・・次の件も僕が行かないといけないのですか？

嫌！嫌！もう嫌！

関わりあいたくない。

こないで！こないで！

おい！後輩！

お前が一人で言えよ！！

そこで向こうがキレたら・・・。

仕方ない。

僕が行くよ。

嫌だけど。

もし僕と一緒に行って、僕が怒らせたら次に出てくるのは上司。

そうになると仕事受けざるを得ない。

やはり、ワンクッション必要だな。

この僕というエリートが。

この僕というエリートが駄目だった時に上司ですよ。

後輩でなんとかまとめるように話す。

キレたら僕というエリートが行く。

ここで収まる様に頑張る。

本当に駄目なら上司現る！！

そんな感じでいいか。

えーと。

やっぱし僕は情けない落ちこぼれのボロボロ野郎だから・・・。

僕を飛び越えて・後輩から上司というホットラインもいいな。

・・・それも一つの手だな。

決していきなり自分が行くことは選択に入れない男、僕。

・・・というわけで・・・不定期連載シリーズ。

暴走編の始まりです。

暴走編 その2

さて・・・その生意気な後輩が行くことに。
偉そうに言ってます。

「よし！前金って言って！仕事追加して・・・数字クリアするぞ！！！」

過去の流れや経験上なにか心配です。

「お前大丈夫か？言えるか？」

心配して聞く。

前回は僕が言ったので。

プライドが傷ついたのか後輩はムツとした。

「大丈夫ですよ！言えますよ！問題ないですよ！」

何怒ってるの？

まあ・言えるのなら・それでいいんだけどさ。

僕には軽口を叩いているようにしか聞こえない。

出発しまして。

待つこと1時間半。

移動で片道1時間くらいかかるから。

そろそろ連絡あってもいいかなと。

会社の電話鳴る。

後輩からだ。

間違いない。

受話器を取る。

「あっ・・・お疲れ様です」
後輩の暗い声。

嫌な予感。

「・・・どうやった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・言えませんでした」

ピキッ・・・・・・・・・・。

そんな簡単に言うな。

「なんで？」

「いやっ、あのっ、なんかっ、言わないといけないのはわかったんですけれどもですね、なんかっ、あのっ、向こうの機嫌がですねっ、悪かったものですからですね」

何言ってるのかわからない。

「てゆーか、言えるって言ってたじゃん」

イライラしてきた。

「その前に1回前金で払わせたんだから、機嫌が悪いのは当たり前前
だろ、それを踏まえて今回も前金って言うんだろ」

「えっ、はいっ、そうなんですが、向こうがですね、その前金のこ
とを愚痴のように言っただけですね、それを聞いてしまったもの
ですから・・・・」

ぷちん・・・・。

「お客のせいにすんなや！」

キレました。

「要するにビビッたんだろ〜が！」
怒鳴ってしまった。

「……………はい」

後輩は意気消沈。

「偉そうに言って、簡単に諦めるくらいなら最初から言うなや！一度言っただけなら責任持ってやれ！人のせいにするな！」
そう言って電話を切る。

……………はあ……………

あのね〜温厚な僕が怒るってことはよっぽどのことですよ。

社内でも、僕が怒ることはよっぽどだから、もし怒ったら気をつけろと言われているのに。

そこまで滅多に怒らない僕を怒鳴らせるなんて……………こいつ。

怒るのが好きじゃないんですよ。

普通そこまで怒るようなことではないのにね。

きつとこれまでの展開と調子の良い後輩の台詞。

あいつの軽い性格が溜まりに溜まって爆発したのでしょう。

……………

……………

……………あつ……………

これって……………

もしかして……………

次回は僕が……………

行くの・・・かな？

ええええええええええ！！

おいおいおいおい！！

嫌だっ！！

またしても！

またしても！

巻き込まれたあっ！！

・・・・・・まだまだ続く。

つづく

暴走編 その3

「よろしくお願いします」

後輩は責任の所存が僕に移ったことにより安心な表情。
こいつのそういうところ・・・大嫌いです。

「・・・・・・・・」

後輩の軽口を無視して無言。

僕のスーパーコンピュータをも土下座するともっぱら評判の脳
はあらゆるパターンをシュミレーションしています。

常に最悪なことを考えながら行動する。

当たり前ですが、なかなか難しい。

つつい都合の良いように考えますから。

今回は向こうが怒ったことを想定する。

「なめんなよ」「まだ信用できんのか」「いい加減にしろや」
そんな中僕の一番良いパターンは。

「そんなこと言うならもうお前のことは取引やめる!!」

「わかりました。すみませんでした。じゃあ。」

これが一番良いよね。

怒らせて相手に言わせて帰る。

これがいい!これにしよう!決定!!

車の中で完全に寝る。

熟睡。

現場に到着。

あ・緊張してきた。

「おう」

いつもの声。

久しぶり、おっさん。

冷静な素振をしながらドキドキしてます。

簡単な世間話から・・・。

「あのー、今日僕がきたのはですね、これからのことなんですよ。」

もう後戻りはできない。

向こうの目がキラリ・・ギラリと光る。

「・・・・・・どうということ？ ストレートに話せや」

うっ……だいたい察知したのか……ちよつと不機嫌。

どうしよう！ストレートに言えって……。

言えないよ！そんなこと！

「これからも前金でくれないと仕事できません！」

そんなこと・・言えるわけじゃないですか！！

こわい！恐すぎる！ここはどうしよう。

遠回しに言おうか・・・いやそうなると本気で怒るな。

はつきり言うのか？言うのか？言うのか？

む
む
む
・
・
・
・
・
・
○

[illegible][illegible]

.....○

[illegible]

●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
○

[illegible]

○

「これからも前金じゃないと受けられませんと会社が言ってます」
あ・・・・・・・・・・・・・・・・。
言っちゃった・・・・・・・・。

長い沈黙。

うわ・・・・・・・・怒ってるよ。

「明確にワシもはっきり言おう」

口を開く。

もう・・・・・・・・怒ってください。

「確かに最初はお前にも昔迷惑かけたからな、会社も不安なのはわかる。」

感情を出さないように話す。

「だからワシも一括で払った・・・・・・・・けどな・・・・今回も
というのは納得行かない！！」

その通りですね。

当たり前ですね。

でも会社の方針ですもの。

いや・・僕の方針も仕事いりません。

もうあんな思いしながら回収は嫌ですから！！！！

「その通りです、お気持ちはよくわかります。僕も仕事は欲しい！
欲しいです！しかしですね・・・・」

「会社の方針なんやろ」

「・・・・・・・・・・はい。」

少し演技をしています。

アカデミー賞に毎回ノミネートされてもおかしくない僕の演技です。

当然向こうは僕の演技に魅せられているはずですよ。

「まあ・・・これ以上前金だと言うのなら・・・ウチは取引やめる。他に頼む・・・そう会社に言え」

おつつつつしやあああああああ！！！！！！！！！！

言わせたああああ！！！！！！

「わかりました、すみません、相談します」

速攻で帰る準備。

いやあ・・・なんとか引き出せた。

これでもうやめよう。

やめるべきだ。

「なんとか会社説得できないですかねー前金じゃなくて」

そんな後輩の訳の分からないコメントに突っ込む気もおきず。

内心・じゃあお前が言えと罵りながら帰社。

遅くなったので、社内には誰もいなかった。

また明日報告だな。

いやあ・・・なんとか・・・このシリーズも終わりそうですね。
良かった、良かった。

う
う
へ

暴走編 その4

会社に報告。

ホントはその場で「わかりました！いりません！！」と毅然とした態度で言いたかったのです。

でも会社が言ってる、僕は仕事が欲しい、となってる以上、僕の判断で即答はできません。

「お前の考えか！」などと言われかねません。

一度会社に報告して、そして改めてお断りです。

上司に報告。

そのままを言う。

「・・・・・・・・」

ん？・・あれ？なぜ黙る？しかもなぜ機嫌悪い？

「お前が腹を括ってるのならやってもいいんだぞ」

え？あれ？どういうことですか？

僕は断りたいです。

でもそれ以前に会社は本当に断れと言ってたじゃないですか。

「しかし、前に回収したの1年半もかかったので、今は調子いいかもしれませんが、怖いです」

ここは言わないと。

本音ですよ。

元々昔のことがなかったら、ちゃんと仕事取ってきますよ。

「それは考え方によるぞ」

何を言い出すんだこの人は。

「色んなお客の中でも逃げて行方知れずのようお客いるだろう。」
いますけど・・・。

「ここは1年以上かかったけど、逃げずにちゃんと払ったじゃないか。そこも考えたらどうだ」

それって・・・つまり・・・僕の責任で仕事を受けろということですか。

要するに簡単に断るという結論に至ったのが気に入らないようです。

まずは受けるための最善の方法を考えてから、それでも受けないのであればいい。

何も考えずに断ることしか頭がないのが嫌みたいです。

それもわかります。

言いたいことはわかります。

しかしですね。

1年半苦しい思いをして回収したのは僕ですよ。

責任は自分にあるからこそ最後まで取立人のように回収したんですよ。

その辛さを知っていて、それくらい大変なお客だと知ってる上で、今がノリノリかもしれないませんが、信用できません。

全部わかってる上で僕は断るのです。

「回収は社内できてるんじゃない！現場で起きてるんだ！！！！」

かの有名なあの人の言葉を僕が本当に言ったかどうかは別として。

「断ります」

言い放つ。

さすがに上司も前回の辛さでのことで僕が決めた判断だと思ったのか、これ以上無駄というような顔をした。

そして矛先は後輩へ。

「お前はどうかんや」

おい・・・余計なこと・・・言うなよ・・・。

「あのですね、僕はですね、本音を言えば、本当のことを言えば、欲しいです。これだけの仕事は欲しいです。」

おい！！

「ですから何か良い方法はないものかと思ってですね・・・」
こいつ・・・。。。。。。。。。

「だったらお前が腹括ったらいいいじゃないか、こいつ（僕）はもう抜きにして」

それでいいです。

そうしてください。

僕さえ関わらなかつたらいくらでも受けて下さい。

「お前が腹括ったら先輩としてこいつもほっけないだろう」

上司はニヤリと僕を見る。

てめえ！何言い出すんだ！

後輩は「本当ですか！」と感嘆の瞳で僕を見る。

お前もなく、騙されんな！

結局責任は僕らにあるんだぞ！

それを証拠にほら、僕が腹括った後の話出ないでしょ！！？

そんなもんですよ、これで問題が本当に起きたら「お前らがやるって決めたからだろ！」ってことになるに決まってら！

そう言い残して上司はその場を去っていった……。

後輩は瞳を輝かせて言う。

「ちゃんとお支払いをしつかりしてくださいって相手に言えいい話ですよね」

そもそもお前が「前金」言えないことに問題があるんだぞ！

何も言えなかった奴がそんな偉そうに言うな！

何もわかってない・・・回収がどんなに辛いかを・・・。

判断を出さなければいけません。

一応・・・良く考えて・・・。

えと。

A 10x10 grid of dots. The bottom row of dots is replaced by open circles. The rest of the grid contains solid black dots.

断る。断る。断る。断る。断る。断る。断る。断る。断る。断る。

断る。

うううううおおおおおおおおおおお！！
！！！！！！！

うおうおうおうおうおうおう！！！！！！！

ぜっっったいに！！！！！！

ことわる！！！！！！！！！！

つづく

暴走編 その5

僕は頑なに断るスタイルを通していますが、上司の矛先が後輩に。一応この後輩が担当で僕がフォローにまわっている状態です。

後輩は仕事したそうなんです。

おいおいおいおい。

あの回収の辛さを経験してないからだろう！

昨日の怒涛なドンデン返しから一夜明けて。

僕の気持ちは変わっていません。

断ります。

間違いない！

断るとです。

断りますから〜残念！！

例えば目の前に1億積みまれようとも・・・・・・・・・・・・・・・・。
はっ！

こ・断ります。

断るに決まってます！！

こ・と・わ・る！！！！

昨日後輩にも責任の重さをずっと話しました。

「何かあったら自腹で済まされる額じゃないんだぞ」

「本当に誰にも迷惑かけずにできるのか？」

「今までの動きでお前は無理だと思う」

「あの時言いたいことも言えなかったお前が何で出来ると思ってる
のかわからない」

とにかく納得するまで話しました。

本人も不満そうな顔をしながら納得したように見える。

僕は後輩が自分の責任で受けると言っても結局は僕に降りかかるわけです。

何かあったときに知らんぷりはできません。

後輩が受けるといったら僕も巻き添えなんです。

僕はやりたくありません。

例え月の数字が良い金額でも信用できません。

営業マンは回収までが仕事なんです。

最後の回収ができないのなら初めから仕事を受けてはいけません。

要するに保身ですよ。

自分が可愛いんですよ。

僕に迷惑かからなければいいんですよ。

本音の部分がそこですよ。

さて・・・朝礼です。

普通に昨日の結果と今日の行動予定を報告です。

僕は報告のあととはっきりと言った。

「よく考えたのですが、やはり僕は前のこともありますし、信用できません。なのでこの仕事は受けません」

よっしゃ！！言っちゃった！！

上司も仕方ないなという顔してます。

ここまで頑なに自分の考えを通したのですから。

もうこの件はいいでしょう。

終わりでしょう。

後輩の報告・・・・・・。

「一晩考えてエステベスさんからも色々アドバイスを貰って非常に

ありがたかったのですが、やっぱり僕はこのお客の仕事がほしいです」

ふ〜ん……………って・うおおお
おおい!!!!!!

おい!おまえ!こら!

まっ……………まさか!!!!!!

まさか!!!!!!

「僕の全責任で!!受けようと思います!!」

で……………でたあ……………!!!!!!

やってくれたあああ……………!!!!!!

受けろと言った上司から見たら代打逆転満塁サヨナラホームラン!!!!

断る気の僕から見たらトリプルプレイでスリーアウトチェンジ!!!!!!

こ……………こいつ……………ふざけんなよ。

あれだけ……………あれだけ言ったのに。

目先の数字に踊らされて。

遠くを見ろよ。

遠くをよ。

近い将来延滞金常連になること間違いない!!

「そうか……………そこまで腹括ってるのなら……………やるしかないだろう」
上司はニヤリと微笑む。

僕は頭きて「お前できるんか」と冷たく言い放つ。

「できます!!」

あゝあ・・言っちゃったよ。

後輩はさあ・・自分でやるとか言ってるけど。

最終的にフォローは僕ですよ。

もうこれを期に僕のフォロー役を変えましょう。

変えてください！

僕は一生ずっとあのお客を信用することはできないですから。
変えるしかないですよ。

つづく

暴走編 その6

先日。

暴走した後輩の発言に怒りを覚えつつ・・・いや怒ったんですが。結局どうするの？っていうことになった。

上司はああも言いながら、後輩一人が立ち回れることはできない
と思っっている。

そうなるって誰かがフォローしてやらないといけない。
誰が行く？となります。

僕は絶対に行きません！
行っただまるかよっ！

そういう僕の反抗的な態度が見てとれるので僕にはお声が掛かり
ませんでした。

おっけええええい！

それはつまり・・・このシリーズ・・・。

終了ってことですよね。

僕と怪しき会社の関係は終わったということになりますよね。
会社との関係は当然ありますが。

僕はもう担当からもフォローからも外れたということだね。

いいい！いいい！

それでいいです。

仕方ないです・・・残念です・・・もっともっと仕事したかったのに

いゝ！！

あゝ残念！！残念！！

結局選手交代！！

後輩と上司が行くことになり、話の続きをすることになります。もう関わりあうことがないと思うと安心です。

しばらくして後輩が帰ってきました。

好奇心満々で聞く。

「どうやった？」

「いやっあのですねっ実はですね・・・・・・」
一生懸命説明してくれたけど、ややこしいことになっているみたいです。

その説明今から書いてみますけど。

うまく伝わらなかったらすみません。

要するに、今話に出ている仕事（A）は前金を下さい。

それはOKをもらったみたいです。

これからの仕事（B）は通常の支払い条件でやります。

ここまでは・・・普通にまとまっている話です。

ここからなんです。

これからの仕事（B）は、今の仕事（A）の前金を入金してもらってから動きます。

だから早く前金下さい。

しかし、その今の仕事（A）は来年の2月から正式にやる仕事なんです。

これからの仕事（B）は12月に動かないと間に合いません。
ということは・・・今月に来年2月の前金を貰わないとこれからの

仕事しません・・・ということになります。

「来年2月にやるAの仕事分の前金をくれないと、12月締め切りのBの仕事はやりませんよ」

わかりますか？

ややこしい話です。

それって・・・非常に無理のある展開じゃないですか？

そうなるのと別にウチに仕事発注しなくてもいい話で。

上司の出した条件は少し難しいような気がしてます。

さすがの後輩もどうしようかと。

頭を悩ませてますが。

僕に聞いてきました。

「どうしますか？」

またかよ・・・お前の考えはないのかよ。

僕の考えを聞いて僕の言う通りにするのですか？

お前はどうしたいんだ!？

自分の考えを言え!

それに対してなら答えられるけど、そんな聞き方なら答えません
!!

答えてやるもんか!!!!!!

「・・・・・・・・僕なら・・前金いつ入れてくれるのか聞くけど」
ああ・・言っちゃった。

まあ・・どう転んでもお客はいい気しない話です。

なんにせよ、僕の話は終わりましたね。

次回からは後輩の動向を追います。

怪しき会社が新シリーズとして動くことになるでしょう。

暴走編 完

つづく

・・・。。。。。。。

・・・はああああ!??!

どういうこと?

どこもこないですよ。

なんでこんな展開になるのですか!!

普通に営業しました。

エリートの僕は自分に厳しく他人にはウルトラ厳しく!
常に向上心持って仕事に取り組んでいるのですよ。

電話営業で話を聞いてもいいと言ってくれたお客様がいました。

「はい!今からいきます!」

颯爽とその場を飛び出した。

社内にはいたくない。

雰囲気悪いので。

現地に到着。

店に入ろうとしたら・・・。。。。。。。

見慣れたロゴの付いた箱があるじゃあないですか。

・・・んん?どこかで見たな・・・。

・・・って、そんなとぼけた台詞はもういいんですよ!

例の怪しき会社のロゴマークですよ!

え・・・ええ・・・えええ・・・。

あの・・・よく見たら・店内には見慣れた商品が置いてある。

怪しき会社の商品ですよ。

まさか・・・ねえ・・・。

店内から担当の人間が出てきて奥へ通され名刺交換。

そこには・・・。

なんと！小さくその怪しき会社の名前が印刷されているではないか！！！！！！

うそーん！！

そんなねードラマのようなことが起って・・・起こって・・・起こったんだけれども。

まさか・・・提携している店に営業することになるとは・・・。
これは・・・話も筒抜けだね。
・・・ということとは。

前金の話をしておかないといけないじゃないか！！！！！！！！

確かに別会社として成り立っているけど。

前金の提案を言わないのならまたおかしい話になる！！

ううううう。

また・・・言うのか・・・。

えーと・・・つまり・・・その・・・怪しき会社シリーズ・・・始まりです。

今度は後輩もいない・・・完全に僕が・・・主役です・・・。
嫌だ・・・。

・・・こんなこと・・・予想できるかっ！！

新手編 開始。

つづく

新手編 その2

僕の中では提携店とのやり取りを考えていたところでした。

一応仕事頂いて、向こうもなんとなくウチのことも聞いているようでした。

「ウチは別会社だから」と強調するので今までの経緯は筒抜けなのでしょう。

僕もそのつもりで仕事を貰いました。

別物として扱うつもりです。

担当も違いますしね!!

実際こっちの方は今のところ問題なく・・・契約書を交わしてないので、そこさえちゃんとすればOKです。

さあ!

そうなるよ!

後輩の方ですよ。

「後輩エリート珍道中」ですよ!

そのつもりでしたけど・・・このシリーズはないですよ!

勘のいい人は既に新展開がわかると思います。

前回の詳しい話は覚えてますか?

来年の仕事分のお金を前金で貰わないと、今年中の仕事は受けない。

ややこしいことです。

僕の聞いていた報告では、その件に関してはOKで、後は前金をいつ入金してもらえるか。

・・・というところです。

何ら問題ない話ですよ?

しかし、お金の問題なので僕は訪問した方がいいのではと思いました。

遠方なんで、行きたくないのもわかります。

後輩は電話でなんとかなると思っていたのでしょう。

「行きません、電話します」

反対はしませんでした。

話を通してはいるはずですから。

そこで後輩は電話する。

「いつお金入れるのですか」

「入らないと仕事できませんよ！」

そこまで強くは言っていないけど、内容はこんな感じですよ。ちよつと言い過ぎかなと思ってましたけど。

後輩も声も話し方もフレンドリーな感じで進んでました。

「いやあ・・・あははは」

それが!!!

突然!!!

いきなりです!!!

「はい・・・はい・・・はい・・・すみません」

声のトーンが一気に下がる!!!

なんだ!?

どうした!?

バブルでも弾けたのか?!

こいつ・・・。

怒らせやがった・・・。

電話の内容を聞く以上明らかに言い方ですよ。

高飛車なんです。

自分でなんでも出来ると思ってるんですよ。

どうやら・あの時はOK出したけれども。

よくよく考えたら。

来年の仕事分払うのは納得がいらないと言ってるようです。

まあ・相手から見たら失礼な話ですよ。

まだ信用してないのかってことですから。

「いや・でも・会社の方針ですから（残念！）・・・はい・はい・・・はい・・・わかりました」

電話を切る後輩。

こらこらこら・・・。

その切り方は喧嘩売ってることになりませんか？

多分「これからの取引を考えるからまた連絡すると」でも言われたでしょう。

そこで「いやいやいや・待ってください」じゃなくて「わかりました」って言ったらさ、好きにしろってことですよ。

それは相手に喧嘩売ってるでしょう。

さあ・大変ですよ。

言葉の責任は重いです。

「責任持ってやる」と言った以上・「やっぱやめます」では通らないこの社会。

「不在でもいいから先方の所行って名刺でも置いて来い！」
後輩を無理矢理行かせました。

このままだと・・・仕事がなくなります。
僕的にはいいですけど。

明日緊急会議ですよ。

さあ・・・新フォロワー役の上司の判断は・・・?!?!?!?!?

次回ありえない展開に僕だけが驚愕の・・・!!!!

つづく

新手編 その3

大変な問題となった怪しきシリーズ新手編。

急展開も急展開。

OKだった前金の話を先方が納得してくれず。

後輩は強引にでも入金してもらおうとして突っ込んだ内容で電話した。

結果怒らせてしまった。

今日はその対応を緊急会議です。

「どういうことや？」

いきなりの上司の声。

まあ当然ですよ。

「それ以前にこんな大事なことをどうして電話で済まそうとするんだ」

そうですね。

「電話してもいいよ、100歩譲って電話してもいいけど、それならば怒らせるなや」

がつくりうな垂れている後輩。

そういえば怒られて電話切った後も「怒った口調ではなかったです」とか言ってたな・・・

口調は怒ってないけど、内容は怒ってるじゃないか！

納得してないのだから。

あいつはそれでも早く入金しろって言ってるんですよ。

怒るの当たり前でしょ。

自分のことしか考えてないのだから。

そこら辺の相手の気持ちを読めないという温度差はどうにかならないものか。

別の同僚が「そうは言ってもあいつ（後輩）に、誰も適切な助言してないことも問題あると思うけどね」

ちよつと待ってください。

これには言わせてください。

確かにこうなった今後輩に対して適切な助言は出来なかったと思われる。でもね、反対していたのに「責任持ってやる」と言った結果がこれですよ。

経験もあるかもしれないけど、本当に「責任」を考えているのなら何とかしようとしていたでしょう。

それを怒られたくらいで電話切って喧嘩売ってどうしよう？はそれはないぞ。

僕の際は先輩がいなかったから、こういう問題は全部自分で解決しましたよ。

時には自腹を切りながら、今もですが。

1年半も毎日通って、千円でも回収。お金が無かったら会社に戻れないのでお客に会社へ電話させたこともありますよ。

ちようとその後輩くらいの時ですよ。

出来ると思うじゃないですか。

ただ言うだけのこと。

言った責任もとれないのに、軽はずみで言うなと思います。

しかも自分の数字のことしか考えてないから見透かされますよ。お客も馬鹿じゃないです。

とにかく会議で今後のことをどうするのかという話になりました。

普通なら上司が謝りにいって、もう一度話をするようになります。

正直僕の手から離れていたので全然関わりあうことはないだろう
と思ってました。

思っていました！

思ってた！！！！

しかし！

ここで！

上司の一言は！

「やはりこれは最初っからこいつ（僕）がやるべきことだったんだ
よ」

はああああああああああああああああああ！！！！！！

！！！！

「1年以上も通った所だし、相手の性格もわかるし、向こうも言い
やすいけど、お前も言いやすいだろう」

おいおいおいおいおいおいおい。

「これからはお前が担当するということで話に行ったらどうだ？」
うぎゃああああああああああああ！！！！！！

丸投げかよっ！！

そりゃあないよ！

僕はやりたくない！！って言ってたじゃん！

言った！

言ったじゃん！

言ったやん！

上司が行っててまた僕が行くのは順番が違いやしないですか！？
ですよ？

ですよ？

ですよね！！！！！

「じゃあ……頼むわ」

駄目だ！駄目だ！ここで返事をしたら！返事をしたら！

これこそ、「言葉の責任」だ！

絶対にまとめないといけない！

駄目だ！

駄目だ！

返事するな！

踏ん張れ！

踏ん張れ！！

「だって、もしこの仕事がなくなると、あそこの提携店の話もなくなるぞ」

ああ・・・そうきますか・・・。

僕も不安に思っていたところを突きますか・・・。

返事するしかないじゃないですか・・。

そうは言っても上司命令です。

「 はい」

ああああ！！

返事したあゝ!!!!!!!!!!!!!!

どうまとめればいいんだ？

電話できないでしょ。

直で行くしかないよね。

そこでもう一度前金の話するの？

うわあああああ。

ヤバイなあ
・
・
・
・
○

完全に主役は僕だな。

う
う
へ

新手編 その4

色々あって・・・なんか僕がまとめることになりました。

後輩はこの件から外されました。

あの・・・「責任持ってやります！」といった唯一の人間が外されるって・・・。

残ったのは仕事いらない病の人間のみ。

なんてことでしょうか。

しかもですよ！

後輩のあの安堵した顔！

おい！

お前！

おかしいだろう！

それは！

ふざけんじゃねえ！

仕事を受けるなど言っただろ！

受けた結果がコレだよ！

巻き込むのがお前の仕事だよ！

僕はアポイントとるためにお客へ電話を入れる。

だからもう受けなければいいんだよ。

断るぞ！

いいな！

おい！

断るからな！

こんな仕事いりませんよ！

びしっど！

ばしっど！

言ってやる！

「もしもし」

電話に奥さんが出る。

「おお世話になりますうゝ．．．！！！！この度はウチの者が大変！大変失礼なことを言いまして。本当に本当に申し訳ありませんでしたあゝ！！私もちやんと指示すればよかったと反省しております！！すみませんでしたゝ！」

おらあ！

どうだあ！

びびったかあ！

こうやって！

びしっ！と言うんだよ。

ホント僕を甘く見るなよ！

今からだよ！

ここは最初に安心させといて！

ここで！

びしっど！

ばしっど！

言うんだよ！

「つきましてはですね、是非お詫びも兼ねてお伺いさせて欲しいのですが社長様のご都合はいかがでしょうか??？」

都合とかそんなんじゃないくてさ、僕の行く時間に合わせろよ！

17時だな！

17時！

17時にしろ！

僕だって忙しいのですよ！

更新したり、更新したり、日記書いたり、更新したり。返事書いたりするんだから!!

あゝもゝ!

17時!

17時!

そっちの選択の余地はないですよ!

ええ!

おい!

わかってるのか!!

「えゝとじゃあ・・19時頃お願いできますか?」

奥さんはスケジュール帳を捲りながら(そういう音が聞こえた)言う。

「わかりましたあゝ!!!!!!19時ですねっ!了解です!よろしくお願いしますっ!!」

19時かよゝ!!!!!!

予定よりも2時間もオーバーやん!!

なんだよっ!

もう!

知らん!

知らん!

時間なんて知らん!

17時過ぎに行けばいいでしょ!

19時????

知らん!

知らん!

約束なんて!

アポイントなんて!

知るもんか!!

・・・・・・・・・19時。

現地到着。

「おう」

いつもの声。

聞き飽きましたよ、アンタの声は。

そのお馴染みの声はもういいです！

さっさと終わらせて帰りたいのですよ！

「この度はすいませんでした！！！（思いっきり頭を下げる）」

そう簡単に頭を下げた訳じゃないですよ！

これはですね、「お辞儀攻撃」といって、僕が頭を下げることに
より、なんか変なビームが飛び出して・・・こう・・・やっつける！み
たいな画期的な・・・あゝ！！もうわけわからん！！！！

「おう・・・まあ座れや」

「・・・・・・はい」

光よりも速かったであろう・僕は席に着く。

みんなに見せたかった。

この速さ。

別に相手にビビってるわけではないですよ。

なんか急にギネスを超えたくなっただけですから。

結局ですね、後輩の言い方がやはり気に入らなかったんですよ。自分のことしか考えてない。

金くれ！

金くれ！

言ってることは誰が言っても同じなんですけどね。

ここは経験なのでしょうか。

言い方があるんですよ。

1年以上通っていたから僕が言いやすいという上司の判断は間違っ
つてはいなくて。

昔話をしながら、なんとかおさまりました。

あゝ・・・良かった・・・。

提携店とも契約書交わせたし。

結果・・・僕が完全に担当に舞い戻ったということで・・・。

なんだよそれっ！！！！

新手編・・・。

終わっていいの？

終わっていいの？

怪しき会社シリーズ終わりますよ！

本当に終わりますよ！

終わりますよ！

終わらせますよ！

いいですね！

お疲れ様でした！

いや・・終わりでしよう。

間違いない!!

・・・・・終わって。

つづく

前兆編その1

パーティーの招待状が僕宛にきたんですよ。

しかも怪しき会社からではなくて、例のほら・あの・提携店があったじゃないですか。

僕が普通に営業に行ったら実は怪しき会社の商品をメインで売ってたっていう……。

あそこからなんですよ。

提携店といいながらも別会社としてやっているそうで。

僕は「怪しき会社」「提携店」の2つの同時担当ということになっています。

まあ・その方が話も色々しやすいということもありますしね。

大迷惑をかけた噂の後輩は相変わらず「いいな〜呼ばれたんですか〜」

うっせ〜！この出入り禁止男！！

お前が！お前が仕事受けると言わなければ……こんなことに……。

お客から招待を受けているので当然出席しないといけない。

受付のお姉さんやそのパーティーに若いなんかおらんかな〜と思いつつ会場へ。

既に気持ちのメインはそっちの方へ傾いていました。

現場へ着くと、提携店の担当の人がいたので軽く挨拶を交わす。

100人単位の大規模なもので、ここまで本格的にやるのかと驚きました。

パーティーが始まり、綺麗な人はいたのですが。

生まれながらに奥手のレッテルを貼られている僕には話しかけることなんて夢のような話です。

一人でポツンと。

飲めない酒を片手にウロウロしていました。

「怪しき会社」の社長を探していたのです。

もちろんいるはずです。

いて当たり前です。

しばらく探してみても会場を歩き回ったのですが・・・いない・・・。
不思議に思い、担当を捕まえて聞いてみる。

「今日は・・・あの社長は・・・遅れているんですか？」

担当はなんとも言いにくそうな顔をした。

「実は・・・ですね・・・」

えっ・・・？

な・なんかあるの？

お・おい・・・。

「ウチと・・・喧嘩してしましまして・・・」
はあああああああ！???!!

「えっ、えっ、マジですか？でも提携店なのに・・・どうするんですか？」

「まあ提携と言っても別会社ですし、これから徐々に（怪しき会社の）名前を消していこうかと・・・」

提携店なのに別会社の原理やシステムはよくわからないけど。

これはマズイと思ってるのは僕だけでしょうか。

こういう事態は予想外です。

僕はその喧嘩した2つの担当なんですよ。

要するにお互いの状況を知る者になるんですよ。

これはやりにくいでしょう。

喧嘩の理由を聞かないと。

「どうしてですか？何がどうなってそんなことに？」

「んー・・・まあ・・・色々・・・ね・・・あるんですよ・・・」

なんとも言いたくなさそうなコメント。

それって完全に大喧嘩じゃないか！！

不安な気持ちのまま終了。

そして次の日。

携帯が鳴る。

嫌な予感。

「おーう。元気か」

で・で・で・でたあー！！！！！！

怪しき社長だあ！！！！！！

「あ・どうもあけましておめでとうございます。先日は大変迷惑かけました」

「おう・・・まあ・・・今年もよろしゅう。」

タイミングが良すぎますよ。

昨日の今日。

ミエミエじゃないですか。

「来週なあ・・・こっちこいや」

「あっ・はい・わかりました」

ええええええええええ！

絶対に！

絶対に！

情報を聞き出そうとしてる！

何か言ってなかったか？

招待客はどんな奴きてた？とか。

嫌・嫌・・こういう世界は嫌。

断るわけにもいかないしなあ・・・。

とりあえず挨拶兼ねて行くしかないか・・・。

「仕事あるんや」

いりません！

「その話をしようや」

嘘つけ！！

例え本当でも・・・いりません！！

板ばさみのような新展開。

もはや「怪しき会社」は「怪しき」ではなく。

会社同士のなにやらよくわからない問題に巻き込まれました。

ああ・・始まった・・。

行きたくない・・・。

行きたくない。

ああ・・・行きたくない。

近日・・・先方訪問予定。

つづく

前兆編その2

昨夜・・行ってきました。
怪しき会社へ。

これまでの経緯は皆さんも知っていると思います。

結構緊張していたのですが、実際は何にも聞かれず。
普通に今仕事をもらっているその打ち合わせでした。

あれっ？感じでしたが、お客がいたので、気を使ってそういう話は
しなかったのかもしれませんが。

結局詳しい話はなく、わずか10分程度で終了。

・・・何のためにこんな遠くまで・・・。
・・・と今回の「怪しき」シリーズは終わりに見えたのですが・
・。

問題はもう一つの「会社」「店」である、提携店のことです。

大きな仕事を頂いているのですが、まずは小さな仕事を先にこな
しました。

その支払いが先月末に入金予定だったのですが・・・。

・・・・・ない。

入金が・・・・ない。

おいおい・・・どういふこった？

こっちもかよ！

喧嘩してようがどうしようが・・・。

同じかよっ！

延滞にあがるお客っていうのは確信犯でやっていますからお詫びの連絡は全くありません。

しかし、そこは一応連絡あったんですよね。

「すみませんが、遅れます」って。

そうなるも今まで連絡もなかったところと比べては筋を通してなと。

油断はできませんが。

連絡があった時に、気になること言ってたんですよ。

「すみません、入金は今週中にしますので、よろしくお願いします」

「何かあったのですか？」

「いやいや・・・こちらの処理上の問題です。入ってくるお金が予定通り入ってこなかったわけですから・・・」

・・・どこが処理上問題だ！！！！

完全にそっちの都合じゃないか！！

でも連絡をしてくれたという誠意を評価せざるを得ないのでもう少しだけ待ってみます。

恐いよね。

この後大きな仕事確定しているものだからさ。

結構不安です。

なんか・ネタというレベルじゃなくなってきましたよね。
ちよっとドキドキしてます。

つづく

前兆編その3

いつの間に摩り替わったのか。

この「怪しき会社」は「怪しき提携店」へと話がズレてきています。
どういふことかというところ。

初代「怪しき会社」の方はなんとかやっています。

まだまだ油断は出来ませんけどね。

まあ・でも・今のところは問題なく。

そこで問題なのはいきなり2代目に名乗りをあげだもう一つの「怪しき会社」

提携店のことです。

ここまでの話がわからない人は過去を読んで下さいね。
長いですけどだいたいわかりますから。

予定通りに入金がない。

ヤバイ・・・。

僕は危険を感じています。

しかし。

延滞金になる会社・店というのは確信犯で入金しないのですが。
ここは一応筋を通してきてます。

「すみません、遅れます。申し訳ありません」
・・・と1本電話入れてきているのです。

そこまでされると最初だし文句も言えず。
少しだけ待つことに。
待つこと一週間・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・ない。

・・・ない。

・・・入ってこない。

うーん。

資金繰りが大変なのかな？

更に心配。

担当者に電話を入れる。

経理にキツく言われていると伝えた。

するとその日の内に向こうの経理担当から連絡が入ってきた。

20～25日まで待つて欲しい。

ちゃんと折り返して報告してくるんですね。

今までのお客とは違う。

こういう問題はどれだけ言っても向こうからの連絡は絶対と言って
いいほどないものなんです。

ここはちゃんと連絡はしてくれる。

入金の意味はあるのだけど・・・。

お金がない・・・。

その「お金がない」ということが大問題だとは思いますが。仕方ないから待とうと思います。

その前に店に顔を出してきました。状況を知るためです。

その辺の僕の心境はわかるのでしよう、担当者は頭を下げた。

「この度はすみません。ホント申し訳ないです。ご迷惑おかけして」
「いえいえ・・・でも実際ですね・上の方からそれとなく言われたんですが・・・上はちょっと心配してるようなんですよ」

「そうですよね」

「そこら辺はどうなんですか？」
僕の今回のメインの質問である。

「大丈夫です」
きっぱりと言う。

「逃げも隠れもしませんから」

あゝそういうのが一番怪しいんですけどね。

ああ！

決定！！

ここはまさしく「怪しき会社」です！！！！！！

つづく

前兆編その4

前金は!?

入金は!?

同時進行で2つの会社とのやりとり!

大丈夫なのか!

ホントに逃げも隠れもしませんか?!

みなさん。

覚えているでしょうか?

怪しき提携店の入金問題。

前回・・僕に「逃げも隠れもしませんから!」と言っただけ。

20日までには入金しますから!

・・・と言いつつ放ったのが2月13日の日記ですよ。

あのね・C級の小説じゃあないんだから。

こんなもん連載したくないですよ。

もっとこう大恋愛を電車男なみに書いていきたいですよ。

それがなんだよ、金がないだゝ待ってくれだイ逃げませんだイってさ!

今日は?

月末ですよ!!

おい!

どうなってんだ!

入金ないぞ!

てゆゝかさ！

20日過ぎてるじゃん！

いい加減にしてくれるかな。

逃げも隠れもしないけどおおお・・・？？？？

20日入金必ずするって？

嘘で逃げるわけですか？

携帯に出ないってことは隠れるってことじゃないですか？

僕だって取り立てなんてしたくないですよ！

でもね！

仕事は回収して完了ですよ。

こっちはちゃんとやったんだからさゝ値引きもしたじゃん。

払うもん払ってよ！

どうして延滞してる方が悪いのに、回収になるとこっちが悪者になるのでしょうか。

文句言うくらいなら払ってよって言いたい。

まあいいですよ。

月末ということで今日中までは待ちましょう。

明日月初め！

電話するからね！！

それはそうと初代「怪しき会社」ですよ。

去年の話覚えてますか？

この仕事だけは前金でもらって、これからの仕事はいつも通りやって話ついたよね。

こっちはお金さえ入れればいつでも「GO」出せるようになってます。約束では今日ですよ。まだ前金ないので。

でもいいですよ。

ここはまだ仕事してないですから。入金があつてからの動きですから。約束は約束。お金は入らないと仕事はしません。今回だけは。

それもあの後輩のせいですよ。

これは後輩の仕事ですよ！

あいつは今パチンコですよ！

おい！

こら！

お前も気にしろ！

ここも！

月初め！

電話するからね！

怒ってますよ！

僕は！

つづく

前兆編その5

まずは入金しないと仕事しませんと言っていた会社へ行く。
ウチの会社の資金繰りの都合とはいえ、もういい加減入金してくれないと困ります。

最近はあるまり電話することもなく。

だってそうですね。

入金しないと仕事しないって言ってるんですから。
向こうのGOサインを待っただけだったんですから。
昔ここを「怪しき会社」と言ってた頃が懐かしい。

現地到着。

「おう」

久しぶりの声。

そうそうこんな声でしたよ。

「どうも！お久しぶりです」

「どしたんや？」

なにもかもわかってますよって顔。

「えっと・・・あの・・・」

僕は言いくそそうに。

「そろそろ仕事の件で・・・」

「おう、そうだったな」

先方と色々話して。

遂に。

「じゃあそれでいけや」

GOサインです！

やった！

やったぞ！

でも！

でもね！

肝心の・・・入金・・・。

僕が言おうかどうか迷っていたら見透かしたように。

「いくらだっけ？そうか・・・。じゃあ月曜に振り込むわ」

おおお！！！！

こっこれは！

この状態は！！

この仕事・・・OKですか！！！！

なっなんて・・・もう「怪しく」ないですよ！

・・・とまあ・・・この件はこれで終了。

問題は昔この初代怪しき会社と提携していた会社（店）。

2代目怪しき会社ですよ。

現在は初代とは無関係になっているそうで。

一時期僕がこの2つの会社で板ばさみになるかと冷や冷やしてました。

この2代目が最悪なんですよ。

前回の話は2月末。

入金がなくて、電話したら、2日後・3日後・・・と先延ばしされて。

折り返し電話はない。

嘘つきなんですよ。

僕の立場も考えて欲しい。

会社に報告している僕としては困るんですよ。

今まで聞いたことなかったですが、

初代に・・・聞いてみようと。

2代目のことを。

僕は尋ねてみた。

すると。

「おい！あそこは駄目だ。やめておけ！」
人が変わったように叫んだ。

「あそこは人を舐めてる。馬鹿にしてる。詐欺人間だ」
すごい怒ってるな。

やっぱり喧嘩別れだったんだな。

「ですよ〜」

僕も本音の部分を使う。

「最悪ですよ！」

「ワシはな、500万出資してるんや。他にも色々あってな、実際は1000万の損や。」

へえ・・・1000万・・・ってうおおおい！！！！
いっ！いっ！いっせんまん！！！！

「今な、追い込んでるんや」

そっそんなに・・・。

こっこれは・・・。

「更にウチだけじゃないぞ、家賃も払ってないし。水道代も。電話代も。電気代も。」

家賃も・・・？

「立ち退きになってるそうだぞ」

!!!!!!!!!!!!!!

「すみません！来週入金よろしく願いします！」

僕は初代会社を飛び出した。

2代目の会社と社長の携帯に電話を入れる。

出ない。

ヤバイ！！！！

しまった！！

僕は車を走らせた。

F1レーサー顔負けの運転。

それはもう光を超え・・・音速だったという・・・。

店に着く。

飛び込む。

従業員らしき人が3人居た。

「誰？・・・」という顔。

うっせー！！！！

「あの・・・」身分を明かし、事情を説明する。

店内はまさに引越しの準備のようになっている。

おいおい・・・マジかよ。

従業員もバツの悪そうな顔してる。

「私言われても・・・」と言いたげな表情。

僕は現状と何度も裏切られたことをぶちまけた。

すると一人の従業員が「今はないけど専務に言ってみたら？」と進言。

「じゃあ待たせてもらいます」

僕は強気に言う。

「今日は来るかどうか・・・」

「いいです。閉店までいます。」
待つこと・・・1時間。

その間従業員がバタバタ動いてました。
闇で連絡してるのかな？

こない。

こない。

くる気配もない。

うん・・・。

今日はもう駄目なのか。

僕は名刺を渡し出直すことを伝えた。

店から出た時に・・・。

何か僕の中で違和感が芽生えました。

もしかして・・・まさか・・・。

僕はしばらく外で隠れてました。

1台の車が停まる。

専務か？！

専務だ！！

教えられた車種だ！

やっぱり・・・裏で連絡とってたんだな！

僕が帰ったと同時だった！

迷わず再び敵地へ。

「あっ・・・」向こうも驚いた表情。
その時点で確信やないか！

「どうも・・専務さんいますか」

後は先程従業員に言ったことを繰り返す。
向こうはひたすら謝る。

謝るのはいいから払えよ。
払うなら何言ってもいいですから。

「これからは私がちゃんとしますから」
専務は言う。

信用できるのか？

店は本当に移転するようで。
違う場所に移るみたいです。

その場所は既に確認済なのですが、ここで引き下がっていいものか。
今日初対面の専務はひたすら頭を下げる。
それが演技とわかってても1度この人を信用してみよう。

2・3日後に必ず電話を入れるから・・と。
でもね電話なかったら・・あんたらもう終わりですよ。
結局1000円も払ってくれず。
来週に持ち越し。

僕は甘かったのでしょうか。
嫌なモヤモヤは拭いきれず。

つづく

前兆編その6

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

「怪しき会社」シリーズ。

今日を持って終了します。

みなさん数々の応援ありがとうございました。

結構読んでくれてた人がいたみたいで。

嬉しい限りです。

一瞬、これからの展開を勝手に作って続けていこうとも思ったりしたのですが。

やはりリアリティある「本当の」話を書きたいので。

あったままを書くことになりました。

そうすると・・・どう考えても・・・今日で終わらざるを得ない。

僕も含めて皆さんが不安に思っていた通りとなりました。

信用するんじゃないかった。

甘かったです。

初代は入金してくれて。

もう「怪しき」ではなくなりました。

非常に男らしいです。

前回迷惑かけられたので心配だったのですが。

ここは逃げも隠れもしませんでした。

そして。

2代目……。

ここは……。

「怪しき」というより……。

「会社」じゃなくなったのです!!

「詐欺」「計画倒産」とも思える今までの行動。

僕だけではない被害。

つまり!!

逃げたんです!!

移転するとは聞いていたのですが、そこには誰もいない。

やってくれました。

やられました。

こんな会社の仕事受けるんじゃないかった。

そういう訳ですから。

今日でこのシリーズ。

「怪しき会社」……。

終了です!!!!!!!!!!!!!!

しかあゝし!!!!!!

終了は・・・!

前兆編です!!

次回は!!

「怪しき会社」タイトル変えず!!

次回!!!!

追跡編で!

再開だ!!!!

どうなるかわかりません!

駄目かもしれないし。

良い方向になるかもしれません。

とにかく追いかけるしかないのです!!

みなさん!

応援よろしく。

絶対に。

名前・店名・暴露するからね!

なんといわれようと!!

絶対に!!!!!!!!!!!!!!

書いてやる!!!!!!!!!!!!!!

追跡編その1（前書き）

長々と休んですみませんでした。

追跡編その1

専務と会い、話をして。

この人を信用しよう。

それが結果甘かったのですが。

その後電話は一切なく。

心配していたところでトンズラですよ。

2代目怪しき会社は店舗が2つありました。

本店が誰も居ない。

もう一つの店舗に移ったことになっているけど、ここもない。
事務所が別にあったのですが、ここもない。

まずは専務の携帯に連絡。

留守電。

社長の携帯に連絡。

留守電。

当時の担当者だった社員の携帯に連絡。

留守電。

こいつら……。

移転したという店に行く。

当然いない。

遅い時間だったのですが。

ポストの入れ口が2箇所ありました。

1つは誰も開けて中を見ることができます。

もう1つは鍵がかかっています。

僕は名刺を誰でも開けられるほうに入れました。

鍵のかかっている方は力まかせにこじ開けようとしたのですが開きませんでした。

少し歪んだだけです。

ポストの中に何か情報があるかもしれないというための行動です。なんとも思いません。

鍵の方にも名刺を入れてその場を後にする。

次に本店があったビルの持ち主の電話番号をメモする。

もう遅いので明日にしよう。

会社に戻る。

もう一度全員の携帯に電話を入れる。

全て留守電。

社員の携帯には。

「大変だと思えますが折り返し電話頂けませんか？」
と入れておいた。

専務の携帯には。

「専務さんを信じて待ってるんですが。」
と入れておいた。

社長の携帯には。

「おかしいんじゃないですか？」

と入れておいた。

最後に全員の名前を個人名で調べてみる。
誰一人該当なし。

今できるのはここまでです。

また動くしかありません。

つづく。

追跡編その2

次の日。

早速名刺を見に店に行く。

ない。

・・・ということは・・・見に来てるんじゃないか！
張り込みするか・・・？

本店があつたビルの持ち主に連絡を入れる。
向こうも待ってましたような反応。

どうやら色んな所から同じような電話があるみたいで。
「あんなモンをテナントに入れてしまつて申し訳ない」
知ってる情報を聞き出そう。

当時契約した時の住所と電話番号を教えてもらう。
電話する。

「お客様の都合により・・・」
やっぱりね。

移転先の地主・・・持ち主の電話番号を聞く。
電話する。

出ない。

これはまた後でいいだろう。

教えてもらった住所先に行く。
なんと立ち退きにあったのかその場所はなにもない。

おいおい。

ウロウロしていたら、同住所のボロアパートを見つける。

まさかな・・・と思い。

一応行ってみる。

飛込みが嫌いな僕が・・・。

何の躊躇せずに・・・。

怒り・・・って不思議ですね。

殺意・・・って強力ですね。

名乗らず普通に「ごめんくださーい」

出てきたのは12歳くらいの外人の女の子。

フィリピンの人かな？

少し身の危険でも感じているだろうか。

警戒心丸出しの顔である。

自分の身分は明かさずに社長の名前を伝える。

女の子は知らないと言を振る。

もっと聞きたかったが、顔色を見る限りこれ以上は無駄と判断。
その場を後にする。

さて・・・困った・・・。

手がかりが何もない。

そこで日課になっている電話チェックをする。

社長と専務の携帯は相変わらず。

だが・・・。

社員の携帯にかける。

「はい・・・もしもし」

出た！！！！！

僕は自分の名前も言わずに。

「どういうことですか！」

声を荒げた。

「すみません、すみません」

「今どこですか」

「いや・・・あの・・・」

「社長は？専務は？」

「あの・・・あの・・・実はですね・・・僕も・・・もう社員じゃないんですよ」

「はあ？」

「給料2ヶ月もらってなくてですね。そのままなんですよ。私も探してるんですよ」

嘘をついているようには聞こえないが、本当だという根拠もない。しかし、やっと繋がったこの電話逃すわけにはいかない。

「一緒に探しましょうよ。貴方から聞いたとは言いませんから。知ってること全部教えて下さいよ」

「・・・は・・・はい」

「社長の住んでいる場所教えて下さい」

「知らないんですよ」

「あのね、自分とこの社員の住処もわからないって、そんな会社どこにあります??」

「ええ・・・ええ・・・」

「ありえないでしょう!」

イラついてるのが自分でもわかる。

「あのビルの持ち主に聞いた場所に行きましたけど。なかったですよ」

「・・・え? そうなんですか?」

「立ち退きにあったような感じでしたよ。電話も繋がらないし」

「そうですか・・・」

「一軒だけ同じ住所の家がありましたよ。でもそこは外人の女の子がいたんで違うと思いますよ」

元社員は僕が言い切ると同時に言い放った。

「そこです!そこに住んでます!」

「ええ?そこ?」

純粹に驚きました。

「フィリピンの人と暮らしていて、結婚してるかどうかわかりませ

んが。子供2人います」

「はあ・・・そこに社長が・・・？」

「いえ・・・そこは・・・専務が住んでいます」

「はああ??？」

訳がわからない。

とにかく動け!・・・だ!

元社員の電話をとりあえず終わらそう。

それなりの情報は得た。

「とにかくもう一度そこに行ってみます。また電話しますよ。いいですか。電話出て下さいよ!」
念を押す。

「は・・・はい・・・わかりました。あ・・・あのくれぐれも私が喋ったことは内密に・・・お・・・おねが・・・」

ブツ。

電話を切る。
うるさい!

僕にそんな注文する資格はお前には・・・ない!!

僕は先程の家に戻る。

近くのコンビニに車を置いて歩いて近づく。

そこには・・・。

以前見かけた・・・。

専務の車があった・・・。

おりや ああああああああああああああ！！！！！！！

僕は家に向かった突進していった。

つづく。

追跡編その3

「どうも」

「………ああ・どうも……」

専務はあっけにとられていたが、搾り出すように言った。

「どういことですか！電話出てよ。どうなったんですか！本店は？移転先は？社長は？金は？金！僕みたいな下っ端にこんな生意気なこと言われて嫌でしょ？僕だって言いたくないですよ。でも仕方ないじゃないですか！逃げるんだあらさ！」

まくしたてる僕を専務は制しながら。

周りを気にする。

確信犯で僕はやってるのです。

家の奥からフィリピンの子供達も心配そうに見ている。

「ちよっちよっちよっちと待って。払わないとは言っていないでしょ！
精一杯の抵抗。」

そんな言葉……なんの意味もないってことが……こいつにはわからないのだろうか……。

「言ってるようなモンでしょ！電話繋がらないし。今時気づかないってのは通りませんよ！ありえないですからそんなことは！電話でないのは確信でしょ？ということですよ！払う気がないってことでしょ！？専務僕がちゃんとやりますって言いましたよね？言いましたよね？じゃあちゃんとやってくださいよ！今すぐ払ってくださいよ。後で専務の方から社長に請求してくださいよ」
よくもまあ次から次へと言葉が湧いてくるもんだ。
びっくりです。

「いや・あの・その・とにかく社長に必ず！必ず電話させますから！」

拝むように僕に言う。

「それで・それで今日は勘弁してくれませんか？」

「駄目です」

「お願いしますよ。子供いることですし」

「僕は貴方を信用して待ってたんですよ」

「はい・・・」

「もう信用できません」

「いや・あの・必ず！！！！必ず！！！！電話させますから！！！！」

「じゃあ知ってること教えて下さい」

「は・はあ」

「社長の家は？」

専務は以前の事務所がある地区の辺りと答える。

正確な場所は覚えていないそうで。

そんなわけないだろ！

「わかりました。まずそこを調べますよ。電話絶対にさせてください。なかったら・またきますから」

僕はその場を去った。

すぐに元社員に電話する。

1コールで出た。

状況を話す。

「社長はどこにいるんですか？」

「ええと・・・あの地区の辺りだとは聞いているんですけど・・・専務と同じことを言う。」

本当にその辺りなのだろうか。

「他には？」

「あのー。社長の奥さんがやってる喫茶店があるんですけど・・・早く言え！」

「どこにですか？」

「ええと・・・」

正確な場所は知らないという。

地区だけを教えてもらう。

最後に奥さんの携帯番号も聞く。

今はまだかけるべきではない。

電話を切ったと同時に・・・誰かからかかってきた。

社長か？

いや・・・違う。

これは移転先のビルの持ち主からだ。

電話に出て事情を説明する。

向こうはかなり怒っていた。

矛先が僕に向いているのではと思うほどに。

話を聞くとずっと家賃を払わず。

水道代も払わず。

警察に詐欺で訴えようとしているところだと。

そんな物騒な話になってるの？

名前だけ伝えて電話を切る。

この人から得られる情報はなかった。

以前の事務所に行く。

誰も居ない。

今度は喫茶店を探そうと。

教えてもらった地区へいく。

探せど探せど見当たらない。

聞き込みを開始する。

本当に飛込みが嫌いだったのかと思うほどの積極ぶり。

聞き込みをしても有意義な情報はない。

騙された？

夜遅かったが、元社員に電話する。

「……電源が入ってないため……」

このヤロー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

僕は切り上げて会社に戻る。

社長からの電話は……ない。

立
 日
 ●
 ●
 ●
 ●
 ○

怒りにまかせて専務のボロ家へ。

車がない。

仕方ない。

ここは出直そう。

今度は元社員の携帯。

出ない。
こいつ・・・。

気にはなっていたので、喫茶店があるという近くの、僕のお客に聞いてみる。
すると確かに昔はあったけど、今はない。
という返事だった。

ますますわからない。

恐らく、色んな人間が、根拠もなく曖昧な情報を流してしまっているから、こういうことになるんだろう。

結局携帯も相変わらず繋がらず。
電話もなく。
動きようがなくなってしまった。

そんな時。

上司から電話。
「どうなっとなや！！！！」

あああああ。

今度は僕が追い込みかえられる番ですか。
つづく。

追跡編その4

動きようがなくなってしまった。

そんな時。

上司から電話。

「どうなっとなんや!!!!!!」

あああああ。

今度は僕が追い込みかえられる番ですか。

しょうがない。

会社に帰ろう。

「どうしてくれるんや!」

辞表出します・・・って言いたいなあ。

ん? 言ってもいいのか?

あゝもういいか。

うん。

もういいよ。

言え。

言っちゃえよ。

辞めるってさ。

楽になるよ。

もういいじゃん。

うん。

そうだね。

わかったよ。

「辞め・・・・・・・・」

言いかけた時。

「番号教えろ！ワシがかける！」

上司が会社の電話から社長の携帯にかける。

今まで散々かけて出ないんですよ。

出ないですよ。

出るわけないですよ。

「もしもし・・・社長さんですか？」

出たんかい！！！！

僕の立場ないやん！

ま・まあ出てくれたことは良かったが・・・

一発で出んなよ！

上司は冷静に。

時には厳しく。

まず会う日時を決める。

さすが・・・。

普段はとてもムカついて。

お前がいるから辞めたいんじゃない！とまで思ってるんですが。
こういう場では経験者のモンです。

色々厳しいことを上司は言ってます。

話をした結果来週に会うということになったそうです。

上司は「お前が謝りの電話を携帯から入れろ。」と指示をする。

「まずなんとかしようとしたのですが、上司が電話してすみませんと。」

なるほど。

アメとムチを使い分けるんですね。

「それから、個人でこれからのことを話しませんかということにして、会って来い」

「わかりました」

言われた通り電話して。

すぐに出た。

最初っから出るよ。

その旨を伝える。

問題なくOK。

今日の夜会うことに。

なんとかここまでこぎつけた。

来週上司と話すまでにどこまで話せるか・・・。

この夜が・・・勝負です。

つづく。

追跡編その5

19時に電話をしてくれと。
約束通りに電話する。

出ない。

てめえ。

何度も何度も何度も何度もする。
20時近くなつてようやく出た。
人と会っていたそうで。
今も会ってる。

終わり次第電話入れる。
現在いる場所だけ確認。
その場所の近くで待つことに。

30分後に電話鳴る。
来てもいいですとのこと。
0分で行きます。

いた。

社長だ。

このやろう。

怒りがこみ上げるが・・・。
アメとムチ。

アメとムチ。

僕はアメなんだ。

でも！

ムカつく！

「この度はすみません」

深々と頭を下げる社長。

「困りますよ。僕の立場も考えて下さいよ」

「すみません」

「正直、ウチの会社は止めといた方がいいじゃないかって言ってたんですよ。それをなんとか僕が通したのにこの有様じゃあ・・・」

「すみません」

「そうになると、会社がやるなっていうのを決行した僕の全責任なんですよ」

「はい」

「こんな金額払えませんかね、僕は」

「はい」

「だから今打開策を話したいんです」

「それについては・・・・・・」
「ここから約1時間・・・」

現状。

そしてこれからの展開。

間違いない大丈夫ということをやと語り始める。

世迷言です。

そんなもん可能ならわざわざお客の信用失わすようなことはしないでしょう。

そこまで先が見えているんなら、サラ金で借りてでもまずはこっちにお金を入れることが重要でしょう。

今のままだと力を貸そうなんて人は出てきませんよ。

「正直言ってますね。」

神妙な顔で僕は切り出した。

「怒らないで下さい・・・僕は信用してません。できません」
もっともだという顔を社長はする。

わかってんのか！

「しかし、僕に責任がかかってくる以上なんとしてでも処理しても
らわないと困ります。そこで僕に提案があります」

「はい」

「今の金額を、私の会社にかかる被害を最小限にして、半分にしま
す」

少し驚いた顔。

「・・・」

「それでウチの上司に言ってみようと思ってます。ただし。条件が
あります」

「はい」

「この提案を通すために社長の誠意がみたいんです。この少しでもいいので支払ってもらえませんか？」

「・・・」

「それを持ってお支払いする意志があることを言って今の提案が通るように上司を説得してみますから」

「・・・ん・・・」

社長はちよつとだけ唸る。

ってゆゝか、悩むところか！

願ったり叶ったりだろうが！

受けるしかないだろ！

「このままだと社長の信頼はゼロです。来週の上司との話し合いも全額の話になるはずです。僕はそこをなんとかしたいんですよ。」

必死で言う。

損害が僕に降りかかるのだ。

それは必死ですよ。

「いや・別に私は全額でもいいんですよ」

はあああああああああ！！！！

この期に及んで何を血迷ったこと言いやがるんだ！

何調子乗ってるんやボケ！

無理無理！

無理に決まってるだろが！
全額だぁぁぁぁ？？？

はぁぁぁぁぁぁぁ？？？？

今の時点で少しも払えない奴が。

電話するまで一切そっちからかけてくる気もなかった奴が。
なにを開き直つとるんじゃ！

これっぽちもない奇跡に何を期待してるんですか？

そんな滅多に起こらないから奇跡なんですよ。

こういうことばかりに助けてくれるはずないでしょう。

こんなに不誠実なお前に。

てめえに。

神様が助けてくれるわけないやろが！！！！

・・・という言葉を呑み込んで。

「いやでも半額ですよ。当然こっちの方がいいに決まってるでしょ？」

「まあそうですね」

「だったら今と後でどういう違いがあるんですか？わずかな誠意見せなかっただけで、全額と半額ですよ。」

「ええ。」

「少しでも貰えませんか？ぶっちゃけていいいます。払ってください
頭を下げたくないが下げる。」

「私も・・・ぶっちゃけで言います。お支払いしたいものは今すぐ

にでも払いたい。しかし。ないものは・ないんです」

あゝあ。

言っちゃったよ。この人。

それはぶっちゃけすぎだろう！

「そうですか・・・」

落胆していると。

「でもですね、来週上司さんとお会いする前に。必ず。必ず。その誠意を見せます」

「お願いします」

お前には何にも期待してないよって感じで言う。

「電話・・・出てくださいね。不安になるんです」

「わかりました」

「毎日電話しますから」

「はい」

「じゃあ、よろしく」

上司に報告して。

今日はもう帰ろう。

長い・・・長い一日であった。

とりあえず。

来週・・・までに。

誠意を見せてくれるのかっていうところだけですネ。

つづく。

追跡編その6

次の日。

早速電話する。

「昨日の今日ですみませんが、支払いできますか？」

「いえ・・・すみません・・・まだ・・・」

電話には出てくれる。

たまに留守電になり、かなり僕をイライラさせるけど。

次の日。

また電話する。

「どうですか？」

「・・・すみません」

次の日。

電話する。

「・・・どんなですか？」

「えっと・・・明日の朝・・・電話下さい」

社長は僕に指定する。

一瞬カチンときたけど。

「わかりました」

次の日。

この日は会議で吊るし上げ。

グダグダ言われている途中に。

約束通り電話をかける。

「今日の昼頃に電話入れますから」

またしても先延ばし。

・・・・・。

「わかりました」

電話を待つ。

かかってこない。

待つ。

待つ。

待つ。

かかってこない。

1時間おきに電話する。

出ない。

なめんなよ！

このヤロー！！

ふざけんな！！

土壇場でドタキャンかよっ！！

もしかしてなんか手続きでもやってるんじゃないのか！

自己破産とかよー！！

あ．．ありうる．．．．．。

おいおい。

ずつつと電話する。

出ない。

これはまた専務の家に行くしかない。

夜専務の家に。

車はない。

どうしよう。

待ってみるか．．。

待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

帰ってこない。

さすがに入るわけにはいかない。

他にも連絡を入れる。

ずつつと電話入れる。

とにかく出ない。

動きようがないので途方に暮れていると。

鳴る。

確認をする暇もなく間違いない奴だ！

「はい」

怒りを込めて電話に出る。

「もしもし．．．」

元気のない声。

死にそうな声。

なんだ？

何があった？

「どうしたんですか？」

僕は演技だと思っています。

一応聞いてみる。

「今・・・やっと開放されて」

消えそうな掠れた声。

恐い人達に監禁でもされていたんでしょう。

そういうことが言いたいのでしょう。

僕は演技だと思ってます。

「え？　そういうことなんですか？」

「まあ・・・そうなんですよ」

「大変ですね」

わざと冷たく言い放った。

同情を誘っているように言ってきたので。

「それですね・・・」

「今日までの支払いは・・・誠意は・・・無理ってことですね」

僕は社長言葉を代弁した。

そういうことでしょ、結局。

別に今開放されたら今からでも会えるじゃん。

何をそんな目にあったことを理由にしてるの？

「はい・すみません」

「どうしますか」

「いや・あの・とにかく明日の朝・私の方から上司の方に電話を入れますから」

「お願いします」

電話を切る。

僕は嘘だと思ってますのでどんなに向こうが大変そうでも同情はしません。

そんな都合よくそういうことが起こるわけないだろう。
いい加減にして欲しい。

次の日。

朝・・・。

電話こない。

イラつく。

全くもう駄目だ。

本当に信用できん。

我慢できずにこっちから電話入れる。
出た。

「とにかく会社に電話してください。」

「・・・わかりました」

電話が鳴る。

上司が出る。

また色々厳しいこと言ってる。
電話が終わる。

結局・・・どうなったかわからない。

外ですぐ社長に電話する。

色々話を聞いて、とにかく上司と一緒に会った方がいいという話になる。

後日必ず電話を会社に入れて必ず会う段取りをするという約束でその場は切る。

その日取りも決めておく。

そんな時・・・電話が鳴る。

初代怪しき会社からだった。

そういえば、ここも数百万やられてたんだっけ。

一応住所を調べて欲しいって頼んでました。

初代は初代で追いかけていたんだな。

「おうおうおう・・・元気が」

「あっ、どうもお世話になります」

「どんなや・・・例の・・・」

「最悪です」

「だろうな・・・けどな・・・あいつは・・・金ないぞ」

「そうですか・・・」

「もしあっても俺の方が早いぞ回収は」

「えっ！マジですか」

「もう色々と手を打ってるんや。」

「それは一度会ってちょっと話させてくださいよ」

「おうおう・わかったわかった」

・・・どんな裏の手を使っただんだ！！

・・・てゆくかホントの話か？！

現在は上司と一緒に会う日を待つばかりということになりました。

非常に厳しい現実ではありますけど。

自己破産するかもしれないですから。

まずは・・・上司に会わせないといけません。

つづく

追跡編その7

上司と会う約束の当日。

午前中に電話を入れてから・・・という話でした。

しかし。

電話ない。

ない。

ない。

予想通り。

出た出た。

やっぱりドタキャンか。

僕の立場は考えないんだろうな。

昼前に電話してみる。

なんと出やがった。

「あっ今お客様の所なのですぐに折り返します」

いや・あの・そういう話じゃなくて・・・。

午前中に電話するって言ったやんか！

そのまま夜まで電話なし。

改めて電話する。

出た。

普通に出てきた。

なんだこいつ。

急に怒りが込み上げてきた。

「お願いしますよ！いい加減にしてくださいよ。なんで出ないんですか！」

怒りの電話。

当たり前だ！！

「えっ・あっ・あの・今日でしたっけ？明日じゃなかったですか？」

はあああああああああああああああ！！

このボケ何を訳の分からないことを！

僕は前の日に電話して！

確認して！

しかもこの時間に上司に電話をするように言ってたはずです！

それを何をこのヤローは！

嘘を嘘で固めた結果です。

「何言ってるんですか！」

怒鳴った。

「あっそうか！ちくしょ！すいみません。勘違いしました。」

「昨日念押ししたじゃないですか！昨日のことですよ？」

「すみません。すみません。明日必ず。必ず。」

「もう今日何処かで話できませんか？何時でも、ご自宅でもいいですから、行きますよ。」

一瞬の沈黙のあと奴はなんと不機嫌に言った。

「……そんな言い方するなら、こっちも受けて立ちますよ!」

はあああああああああ!!!!

「そんなね、人のプライベートや場所は知ってますよなんて遠回しの言い方するんならこっちにだって考えはありますよ!!」

こ……こいつ。

逆ギレしやがった。

どうやら・「ご自宅」と言ったのが気に入らないらしい。

「何処に逃げ込んでいるか知ってますよ」「いつでも行けますよ」と取ったみたいで。

実際色々調べたら、彼女の家みたいで。

本当の家は例のフィリピン人と暮らしている専務がいて。

この社長は女の家逃げ込んでいたのです。

「女の家に行くぞ」という脅しに聞こえたんでしょね。

まあ……ね……ってゆくか……。

詮索されるの当たり前前の立場だろうが!!!

なんだその筋違いのキレようは!

お前が!

お前が!

お前が!

逃げも隠れもするから!

逃げると思っているから!

不安なんだよ！

心配なんだよ！

逃げた場所聞くのは当たり前だろ！！

それを・・・はあああ？！！

「プライバシー」だあああ！！！！

そんなもん今のお前にあんのかよっ！！

後ろめたいから怒るんだろーが！！

逃げようとしてるから知られるのが嫌なんだろうが！

だったら早く金払えや！！！！！！

はあ・・・はあ・・・はあ・・・。

・・・と怒鳴りたかったが。

僕が心の中でそう思っている間中、向こうは逆ギレ状態ですつと喋ってるんです。

グダグダグダグダグダ。

「貴方の会社だけではないんですよ。それを他にも色々対応してるんですから。人間ですから。間違いくらいありますよ。勘違いくらいありますよ」

ウダウダウダウダウダ。

「今はホントボロボロなんです。家だって今は専務と住んでいるんですから。貴方にプラベートなことまで言わないといけいのですか！」

向こうは何か僕に「すみません」と言わせようとしているみたいで。

僕としては悪いと思ってないので誤る気は全くなく。

ベラベラ喋っているのを聞いているだけです。

早く終わらないかな。

ある程度話し疲れたのか、一瞬喋りが止まった。

あっ・・・今だ。

「まあ・嫌ならしいですよ。それでどうするんですか」

「・・・・・・えゝ・・・明日・間違いなく電話します！絶対に電話します！」

「ホントですか？」

「はい。間違いなく貴方の上司に電話します。そこで改めて時間場所を決めさせていただきます。」

「わかりました。お願いします。これ以上信用を失わせないで下さい。ただでさえないんですから」
嫌味を言って電話を切る。

電話はかかってくるだろうか・・・・・・。
次回は上司との直接対決になりそうです。

つづく

追跡編その8

逆ギレ事件から一夜明けて。

上司あてに電話が鳴る。

おっと約束通りに電話してきたなと思っていたのですが。

電話の相手は違う相手。

くそっ！

またかよっ！

いい加減にしろと思っていたのですが。

上司あての電話の相手はこの怪しき会社に関係する人だったのです。

なんと。

被害者の会を結成して警察に行こうと集めているのです。

これは大事な状況です。

これは詐欺だと。

怒っている方達が足並みを揃えてやっつけませんか・・・と言ってきたのです。

上司はその場は曖昧に返事していたのですが、

知り合いからの電話でこのままだと断ることもできずに参加することになりそうです。

正直・まずいです。

ここからは僕の推測ですけど。

今回の件で、被害者の会を作るとするのは・ある程度回収を諦めている人達だと思います。
動いても取れない。
動かなくても取れない。
そうなる・選択としては動く方を選ぶことになったんだと思います。

警察沙汰にする。

頭で動いている人はきつと警察に行ったんでしよう。
すると1件だけなので警察も動いてくれない。
それを被害者の会を結成して、これだけの被害なんだと、再度警察へ。

そうなると警察も動かざるを得ないのでは。

その考えもありですけど。

僕はまだ回収を諦めたわけではありません。

汚い言い方をすれば、他の会社なんてどうでもいいんです。
自分のお金さえ回収できれば後はどうでもいいのです。

それを足並み揃えようと、そういう問題になるわけですから、もう確実に回収できません。

抜け駆けもできなくなります。

しかし、このまま逃げられるという不安もあるんですよ。
今月の早い時に皆で集るそうです。
どうするものか・考えています。

そして。

電話が再び鳴る。

今度こそ奴だ。

上司が出る。

「いいですよ」

ウチの会社にくるみたいだ。

やっと・くるんかい！

遅いっつーの！

11時30分に会社にくるそうで。

実際きたのは11時50分。

お前ふざけんなよ。

きた。

上司と僕と奴。

まずは当たり前のように頭を下げる。

「この度は・・・」

僕がアメとムチでいうアメならば。

上司はムチです。

「まあ・それはいいですから・お金の用意はできたのですか」

「はつきり申し上げてできておりません」

おいおい。

開き直りかよ。

奴は書類を2枚程出す。

その内容は、これからの予定が書かれてあった。

それから延々と先日のような世迷言を話し始める。

昔から嘘をつく人に限ってよく喋るといいますが、まさにそれが当てはまるような・・・。

その書類も後から読ませてもらったのですが。

全然駄目な内容です。

会社に出す書類というのは、これからの返済計画でしょう。

「この日までにいくら返します」ということを書いて初めて会社に提出できるんです。

その内容をOKするのは、それからの話なんです。

奴がもってきた書類は結局世迷言を文章化しただけで具体的なことは何一つ書かれていません。

つまり「報告書」なんです。

「これは会社に出す文章ではない」
上司も却下しました。

「作り直してきてください。もっと具体的に。」

最終的に書類の作り直して出直すことになりました。

また・・・くるのに何日かかるのやら・・・。

最後に上司の呟きが頭の中から離れません。

「これは・・・もう・駄目だな・・・」

つづく。

追跡編その9

その日の夕方・僕は初代怪しき会社へ行くようにしました。
色々情報を与えたり貰ったりしないといけない。
集まりのことも言わないといけない。
何か裏技でもあるのでしょうか。

「おうおうおう・・・」

社長はいつもの調子で僕を迎えた。

最初はごく普通の世間話と仕事の話。

それがある程度終わってから・・・。

「どんなや？あいつは」

本題に入ります。

「どうもこうもありません」

僕はこれまでの経緯を話す。

初代の耳に情報は既に入っているのだろう。

僕の話にも驚きもせず。

知ってるような表情。

「それで今月のどこかで皆で集って話をするそうですよ」

「なに？」

この件は知らなかったみたいで。

「そうなんか？」

「ええ・・・そんなことを上司に電話あったみたいですよ」

初代はすぐに電話を取り出し鳴らす。

相手は移転先の地主のようで。
あのすごい怒っている奴です。
やはり知っているんですね。

情報が飛び交ってます。

初代は確認の電話をして自分も出ると言い、電話を切る。
それから少しだけ話をして僕も帰った。

結局裏技は・・・なし。

そんなさもありげなこと言うからさく。
僕も勘違いするじゃないですか。

この日はこのまま終了です。

まとめると、2代目は詐欺師だということです。
嘘ばかり並べて。

表向きだけ良いように言う。
人を舐めてますよ!!

さて・・・。

突然ですが。

この追跡編・・・。

これにて終了です。

流れは変わらないまま。

つづく。

絶望編その1

この仕事に就いて6年になります。

こんなことは（回収で）初めてではないでしょうか。

最低最悪の客・・・いやもう「奴」を相手に色々動いてみたのですが。

とんでもない結果と状況になってきたんです。

思えば・・・最初は巻き込まれて。

初代怪しき会社を前にバタバタしてたのですが。

いつの間にか2代目が出てきて。

今やもう2代目の独壇場ですよ。

どうなるの？

どうすればいいの？

第六部開始します。

僕は呉という隣町で外回りしていました。

携帯電話が鳴る。

上司からである。

内容は・・・。

2代目怪しき会社の！

社長の！

携帯が繋がらなくなった！

・・・なんだそりゃ？！

慌てて僕も携帯に電話する。

「お客様のご都合により・・・」

ガラガラと音を立てて何かが崩れ落ちる。

・・・嘘だろ・・・おい。

こういう状況でこうなるってことは・・・。
そういうことですよ。

逃げたんだ。

昨日の今日で！

なんで！

どうして！

そんなことに！

なるんだよ！

ふざけんな！！

元社員にかける。

他の会社からも同じような電話があつたみたいで。

「そのようですね」

「社長の今住んでいる住所をなんとかして教えて下さい」

「えっと・・・あの・・・社長の秘書的な立場の人がいますんで携帯番号を教えます」

はやく言えよ！！

今頃になって言うなよ！

お前も結局グルなのか?!

教えてもらった携帯に電話する。

その秘書だがなんだがわからない奴が出る。

とにかく会って話そうということになる。

ファミリーレストランで会うことに。

僕はすぐに上司に電話。

上司も行くということになる。

ちなみにその電話している最中に警察に捕まりました。

運転中の携帯電話使用とシートベルトしてなかったからだって。

2点の減点と罰金6千円だってゝあははゝ。

まあどうでもいいことですが・・誰か聞いてこの悲しさ!!

現場に着くとそこにはなんと見慣れた顔が。

以前立ち退きになると聞いて、店に飛び込んだ時にいたおっさんだ。

こいつが秘書?

無関係を装って何を偉そうに。

すぐに座り早速本題。

現在住んでいるといわれている住所を聞く。

やはり女の家だったみたいで。

結婚してるのかどうかわからない。

そんな時上司が来た。

簡単に挨拶。

すぐに本題に入るのかと思いきや・・・。

頭に激痛が走った。

上司はいきなり僕を平手ではあるが殴りつけたのだ。
「なにやっとなや！お前は！」

店内は一瞬・騒然となった。

つづく。

絶望編その2

・・・頭が痛い。

静寂になったのはホント一瞬だけで。

何事もなかったかのように時間が流れる。

周りは気づかないようにしているが、明らかに様子を伺っている。
一斉に僕達に注目が集まっているのがわかる。

僕の中では時間が止まったようだった。

「すみません」

「ま・まあまあ・・・」

その元秘書は慌てて止めに入る。

殴られた時は、怒りを覚え、もう辞めることも浮かんだが、
すぐに理解した。

上司はわざと殴ったのです。

これは作戦なんです。

上司の考えはこうです。

相手は詐欺師だと。

その詐欺師の中で社員として働いていたのだから、こいつらが知らないはずはない。

そうになると、社員全員が詐欺師の片棒を担いだことになる。

この元秘書も元社員も・敵だ！・ということである。

その件に関しては否定しない。

だって元社員も今頃になって秘書がいたとか言ってくるんですから。

初めから教えてくれれば良いわけで。

その敵をビビらせるために僕を殴ったのです。
相手を殴るわけにはいかないですから。

そのことを理解した僕は怒りの矛先をおさめ。

がつくりうな垂れるという演技に入ったのです。

事実・後で上司から「悪かった」と謝りもあったので、僕の理解は正しかったのでしよう。

今日この日だけ一瞬ではあるが上司と心が繋がった気がします。
言っときますけど！

この一瞬だけね！

話は続くが有力な情報は出てこない。

そんな時上司が口を開く。

「株式会社ってことになってますけど・・・。」
えっ？えっ？えっ？

「本当は株式会社じゃないんでしょ？」
なっなにいいいゝ！！！！

元秘書は痛いところかれたような表情で。

「え・ええ・はい」

おいおいおいおいおい。

最初っから・・・。

詐欺じゃないですか！！

しかも社員全員知っていたとお？

まさにグルじゃないか！

冷静を装っているが僕の頭の中はパニックに陥っている。

「じゃあ・貴方達は給料貰ってないとか、被害者のようなこと言ってますけど、詐欺の片棒を担いだことになりますよね」
上司は言った。

「もしこのまま本当に被害者の会で警察沙汰になったら、真っ先に貴方達が疑われますよ。」

そりゃそうだ。
だって。

「知ってたんですから！株式じゃなかったこと。」

「え・ええ・それは言わないということは・・・」
笑みを浮かべながら元秘書は言う。

「そりゃ無理ですよ。」

当たり前だ！

何言ってるんだ！！

元秘書は色々と言いつつ言い始める。

「最近知った」「僕はやめたほうが良いと言った」「あいつだきや・・・・」

そんなこと言ってもね。

知ってたんですから！

もう言い訳しても無駄でしょ！

突然元秘書の携帯が鳴る。

どうやら僕と同じ境遇の人からみたいで。

僕達の次にここで会うという話をしている。

それは遠回しに僕らの話は終わりたいのですか？

しばらく話をして、上司もこれ以上は無駄と判断したのか今日は帰ろうとした。

その時！

向こうからなんと説明していいか・・・。

妙な男が入ってきた。

この人が・・・僕らの後に会うという人みたいです。
明らかに・・・あっち系の・・・男である。

これは・・・このまま帰るわけにはいかない。

僕と上司は・・・上げかけた腰を元に戻した。

つづく。

絶望編その3

結果だけで言えば。

間違いなくそういう人なのですが。

一切そんな素振りを見せません。

・・・確かに怪しい。

普通の顔してるのですが・・・。

笑顔絶やさずいつもニコニコ・・・。

でも・・・オーラが見えるのでしょうか。

危険な匂いがあります。

僕は初めての経験の連続で。

結構ドキドキしていたのですが。

さすがそこは上司です。

普通に話し始めました。

向こうも当然恐いようなことは言ってきません。

ただ、元秘書だけは緊張しているようでした。

この秘書は小心者です。

きつと。

だが、こういう危険な人に限って情報を知っているはずなんです。

色々と話をした結果。

ある事実が浮かび上がった。

この人も結局2代目を追いかけているみたいです。

危険なあの人は元々怪しき会社移転先のオーナーの取立てで動いて

いて。

そのオーナーが悪いのは2代目だと。

それで2代目の調査で動いているようでした。

本当かどうかわかりません。

あくまでも推測です。

そんな感じだったいうだけなんです。

それにしてもややこしくなってきた。

移転先のオーナーも同じ人種ではないか。

何かと怒っていたが。

僕が知っている情報は全部知っていて。

さすがだ。

逆に知らない情報も絶対持つてるんだと思うのですが。

そこは教えてくれません。

うまく違う話にもっていきます。

このままここにいるのは時間の無駄だと。

上司は名刺交換してその場を後にした。

夕方。

教えてもらった住所を頼りに2代目が住んでいるといわれているマンションに行く。

逃げ込んでいるのだが、その奥さんだかなんだかわからない人の名前があるかポストを調べる。
あった。

すぐにインターホン押す。

女性が出た。

「はい」

「すみません、ちょっとお聞きしますけど。ここに（2代目の名前）さんはいますか？」

「いいえ・いませんけど」

「おかしいですね。Aさんって名前の所にいるって聞いたんですけどね」

「あの・Aって名前も一つあります」

「え？」

僕はもう一人のAの場所を聞く。

ポストをみると名札を剥がしたような跡がある。

佐びを入れて、再度そのインターホンを鳴らす。

出ない。

しばらく何度か鳴らしてみるが出ない。

マンションを出て、窓を確認してみる。

見えるまで非常に厳しかったがかろうじて見えた。

真っ暗だった。

まさか・・・一緒に逃げたのか・・・？

仕方なしにその場を後にする。

くそっ！

くそっ！

くそっ！

何気なしに社長の携帯に電話する。
繋がらない。

もう一度電話する。
当然繋がらない。

溜息をついて。
無意識に専務の携帯にも電話入れる。
1コール・2コール・・・・・・・・。。

おかしい。

いつもならここで留守電になるはずだ。
コールがやまない。

僕は無意識ということもあって。
どれだけの時間かも把握してない。
きっと長い時間鳴らしていたのでしょう。

「もしもし!？」

なんと！

少しキレ気味で専務が出たのだ。

一気に現実に戻された僕がその時発した言葉は。

「お前ら一体どうなっとなや!! いい加減にせいや！」

後にも先にも二度と言うことはないであろう。
悲鳴にも似た叫び声であった。

この電話を切ってはならない！
僕の本能が言っている。

つづく。

絶望編その4

僕は仕事上でも私生活でも本当にマジで怒鳴るということはありません。

過去に怒ったことはあります。

そういうネタの日記もありました。

確かに怒ってます。

でもその時は確信的にやってることがあるんですよ。

今回の件は今まで一度も感じたことのない感情が出ました。

何も考えずカッッとなって口からでた言葉が出たんです。

僕と2・3度会っている専務からすれば僕がそんなことを言うとは思ってなかったのか。

間違いなく電話の向こうで動揺しているのが伝わった。

「なんで携帯繋がらんのや!!」

僕の怒りはおさまらない。

「2・3日中には(携帯は)元に戻りますから」

「どこにおるんや?」

もはや敬語ではなくなった。

「えーと・・・今は・・・」

「社長のことよ」

「今は別行動です」

「どこいったん?」

「えっと・・・しゅ・出張です」

「だから何処いったんか！」

「・・・とにかく！必ずなんとかしますから！逃げも隠れもしませんから！」

「あゝ？あんたねえ・・・」
プツ。

切りやがったゝ！！！！
なんだこいつ！！

次の日。

進展はなく。

再度専務の携帯に電話する。

また出た。

なんだこいつ。

ある意味馬鹿か。

メールでもやってたんでしょうか。

思わずボタン押してしまったという感じです。

昨日怒鳴ったことは少し反省。

開き直られると困るので。

「どんなですか？」
優しく言う。

「いや・・・まだですけど・今週中にはなんとかしますから」

「社長いるんですか？」

「いえ・・まだ出張です」

「どこにいるんです？」

「え・あの・・大阪に・・・」

「は？なにしに行ってるんですか？逃げてるんですか？」

「そんなわけありません！色々あるですよ！こっちも！」
またキレ気味に専務は言った。

カチン。

「あんたら詮索されて当然の立場だろうが！」

ああああああ。

怒鳴ってしまった。

またしても。

「今のこの状況で逃げた他にどんな理由があるんだ？！」

「あっ・あ・あの・・・」

「逃げてないというのなら・・携帯が繋がらないのはおかしいだろう！」

「逃げも隠れもしませんから！」

「だったら、社長に連絡させてください。必ず！絶対に！逃げてないと言おうのなら
ば！」

「わかりましたよ。」

「これで電話がなかったら逃げたと思いますよね。誰だって。」

「え・・ええ」

「じゃあ・お願いします」

電話を切る。

あゝ！ムカつく。

一応・元秘書に連絡だけしておく。

大阪に行ってる話しには驚きを隠すことできなかったようで。報告だけして電話を切る。

すぐに折り返しの電話が鳴る。

元秘書からだ。

出張はしてないという新情報。

もう何かホントでウソかわからない。

ある疑問が頭に浮かぶ。

本当はこの会社自体が全員グルだったのではないか・・・。

初めから皆で騙そうと計画していたのだが。

そこで本当に社内で揉め事が起こって裏切ったりしてるのではないか・・。

あまりにも後からの情報が出てくるがおかしい。

最初に全部話せばいいじゃん。

結局元社員も元秘書も情報の出し入れをしています。
こいつらも信じられない。

さあ・・・どうしよう。

今までは結局バタバタ動いただけで。

成果を問われると何にもない。

被害者の会・・・日時が刻々と近づいてきています。

お金は諦めて出席するべきか・・・。

辞退して独自に動くか・・・。

選択を迫られています。

絶望編その5

人と人との巡り合いはそれまでの過程が最悪なものだったとしても、どこかで偶然に再会したり、素晴らしい出会いがあるかもしれない。

今回の2代目怪しき会社によって・・・集った人達。被害者の会またの名を債権者の会。これもそんな巡り合いの場なのだろうか。

集合の日の前日。

とにかく最後まで動いていました。

やはり他はどうでもいい。

自分の回収さえできれば・・・の精神でやっていたのですが。もう・・・どうにもなりません。

400万やられている初代怪しき会社もも出席するということ。足並みを揃えた方が良いと判断。

上司に報告して、出席する意向で話をする。

正直・・・かなり落ち込んでいます。

実質これで100万はもう返ってきません。

皆と足並みを揃えるということは帰ってきた僅かなお金の均等に分けるのです。

これでもし返ってきてても、受注金額の1割かそれ以下。

つまり僕の場合は100万が「良くて」10万なんです。

その10万を返ってこさせるために動いた労力は？経費は？動かない方が良いのでは？と思って仕方ありません。

だが・皆の問題はもうお金じゃないのです。
感情なんです。

あいつだけは許せない。

牢屋に入れるべきだ！

事実・今回の会のことを各会社に関連を入れた人の金額は8万です。
良くて8千ですよ。

それでも中心になってやるということは。

怒りしかないので。

僕も・出席することにします。

やはり2代目は許せない！

もう一つ。

株式会社ではなかったことを元従業員達が既に知っていたこと。

僕の中ではこいつらも同罪だと思っています。

それを自分達も給料貰ってないから被害者だと。

よくもまあ・ぬけぬけと。

当日。

言われていた場所に行く。

集ったのは全部で約20社くらい。

おおっ・すごいな・。

異様な雰囲気です。

えっと・あれ？

あの・・・・知ってる顔がちらほらと・貴方達もですか？

ふと気づくと・・・・。

あの時の危険な男もいました。

でもこの人は結局途中でいなくなったのですが。

足並みを揃えるより自分達独自で動くつもりなんでしょう。

今回の会は情報交換。

そしてこれからどうするかという対策の話でした。

情報交換は皆さん・さすがです。

僕だけの情報だと思っていたのですが・・。

そんなもんは誰でも知ってる常識のようなもので。

それ以上の情報もありました。

僕と今まで話していた元社員は・・・・・。

2代目と一番近い存在だったのです！

はあああ??

2代目は他所の県で失敗してこっちに逃げてきたのです。

その情報は知っていました。

しかし・・他所の県で一緒にやっていたのが・・その元社員だったんです。

そんなことは聞いていませんでした。

元社員に対して怒りが湧きました。

他にも色々情報交換して。

これからどうするのか。

結論は・・刑事告訴するということです。

それを頭になってやるのは・・・・・。

初代怪しき会社の社長です。

「俺はやる！金が戻ってこなくてもやる！あいつは許せん！」

それに対して足並みを揃えるかどうかです。

皆会社を持ち帰ったりしてその旨を後日伝えることになり今日の集りは終了です。

もう関わりあいたくないというのなら・・・断りを後日入れるのです。

僕個人は積極的に全面的に参加したのですが。

会社が何て言うか・・・まずは報告・相談です。

その後名刺交換で動き。

知り合いの会社にあ挨拶して。

何か可愛い人いたんでポロっとなつて。

帰ろうとしたのですが、一応・・・初代怪しきに連絡を入れる。

「おうおう・・・」

「今日はお疲れでした」

「おう・・・今この喫茶店にいるから・・・お前もこいや」

「はあ・・・」

「元従業員が何人か来とるぞ」

「えっ？」

「あいつ（元秘書）もおるぞ」

「すぐに行きます」

まだ今日は終わらない。

怒りに満ちて僕は喫茶店に向かう。

この気持ちを奴らに言いたくて言いたくてたまらない。

それが例え筋違いになったとしても。

つづく。

絶望編その6

何も考えずに。

これまでの経緯から社員全員のグルだと思っている僕としては。

何食わぬ顔で喫茶店にいるという元従業員に対して湧き出てくる怒りを抑える術は今僕にはない。

喫茶店に入ると。

前回ファミレスで会った元秘書。

名刺交換していないが見たことのある顔・・・メガネ。

全く見たことのない奴・・・ノッポ。

そして名刺交換したことのある奴・・・ハゲ。

ハゲにいたっては1度しか会ってない。

早々に辞めたと聞いていた。

僕が情報を聞いていた元社員。

今日発覚した・あの一番2代目と付き合いが長い奴。

こいつはいなかった。

一番言いたい奴だったのだが。

全員に名刺を渡す。

話を聞くと。

こいつらも給料を貰っていない。

自分達も被害者だ！債権者だ！

ということ出席しようとしたらしい。

だが・・・今回は業者だけの集りで却下になって。
喫茶店で待機していたのだ。

元秘書が初代怪しき会社の社長と顔見知りだったので連絡がいったのだ。

他にも何人か業者の人がいた。

何が・・・被害者だ！

この怒りを言いたくて言いたくて。

今は初代が色々話している。

僕は我慢して聞いている。

初代もウチの上司と同じこと言っている。

告訴となると株式じゃないことを皆知っていた。

お前らも同罪になる・・・と。

ただ・・・同罪という判断は警察がする。

どうなるかは本当の所はわからないが。

厳しい取調べはあるということ。

初代はその説明をしていた。

その後話は一転2代目の話へ。

何か悪口大会になってきた。

僕はまだ我慢。

話が途切れるのを待っている。

こいつら・・・悪口言える立場か？

僕はあくまでも会社全体の詐欺だと思っているので。

自分は悪くないという態度がどうもカチンとくる。

話が途切れた。

今だ。

なるべく怒りを抑えて。

冷静に。

「あの今回告訴とか言ってますけど。」
いきなり切り出す。

「そうなるに従業員の貴方達も同罪になるかもしれませんよね」
空気が変わる。
知ったことか。

「貴方達はその覚悟はあるのですか？」
あえて「元従業員」とは言わなかった。

4人いる奴らの顔色が変わる。

僕みたいな小僧に言われたのが気に入らないのか。

4人とも黙った。

「ある・ある。覚悟はあるよ」

初代の社長が言った。

それ反応して元秘書が「いやあ」と苦虫を潰したような顔。

・・・ということは覚悟がないんじゃないか！

ふざけんな！

「確かに給料貰ってない皆さんは僕個人としては大変だと思えますよ。聞いたら保証人にもなってる人がいるそうですし」

少しフォロー入れる。

「でもね、会社として、ビジネスとして考えて下さいよ。株式じゃないのに株式を入れて名刺を使っていたのでしょ？」

僕は2代目の名刺を出しながら。

「しかも皆さんの肩書きは取締役とか統括事業部とか・・・知らない

かったじゃ通らないでしょ？」

静寂。

「だから僕は皆さん最初っからグルだと思ってます。そう思われても仕方ないでしょ？」

そこで話は少し横道に逸れる。

その時に僕の聞いていない電話番号が出てきた。

結果としては大した問題のない番号であったが、自然と僕はメモをした。

そこで！

元従業員の一人！

こいつは常務取締役だったが！

ハゲがいきなり立ち上がり！

「アンタは探偵か？なんか色々名前とか書いてるけど」と詰め寄ってきた。

カチン。

どうして・・・皆・・・僕を怒らそうとするの？

僕はハゲとは名刺交換してるんですよ？

アンタ達から怒らせているんですよ！

わかってるのか？

「メモするのは当然だろうが！」

喫茶店で僕の声が響き渡った。

つづく。

絶望編その7

本当にね。

何度も言うようですが。

僕は怒るようなキャラでもないし、性格でもない。

会社からは後輩にも怒れないくらいの駄目人間なんですよ。それはそれでどうかと思いますけど。

そんな僕が怒るなんてことはすごいことです。

この元常務取締役のハゲが僕の内に秘める怒りを目覚めさせたのです。

僕は昔このハゲと名刺交換をしています。

その名刺をちゃんと持っています。

今となっては株式ではないのに株式として使っていたのだから・・詐欺名刺だけだね。

どうしてこいつはこんな行動に出たのか。

どうして僕に詰め寄ったのか。

訳のわからないことを言いながら。

「探偵」??

はああ？

僕の名刺の裏にはちゃんと事業内容も書いてますよ！

その行動は明らかに不自然で違和感があり、今ここで、この状況で

動き出すような空気ではないはずです。

どうして……。

なぜ？

簡単です。

すぐに理解できました。

それは僕のメモに自分の名前がないかどうか確認するためです。

そのために勝手な言いがかりをつけて確かめようと詰め寄ってきたんです。

実際・僕と名刺交換したことは間違いなく覚えていないと思います。ハゲの方から名刺出してきたクセに。

顔くらいは見たことあるでしょう。

僕がありますし、挨拶もしたことがあります。

この喫茶店に入って話を聞いている間一番気になっていたのはこのハゲです。

「元」とはいえ・常務取締役にも関らず。

「僕は何にも知りませんよ」という態度。

他人事なんです。

お前常務でしかも取締役だろうが！

何も知りませんでしたは通用せんぞ！

そして今回の行動。

自分のことしか考えていません。

「メモするのは業者だろうが誰だろうが！当たり前でしょ？！」

「いや・でも色々書いてて・・・」

「だから！当たり前だろう！何が探偵や！僕はアンタと名刺交換してますよ！」

「いや・・・」

スゴスゴと席に戻る。

「何を言つとるんや！」

後から話しましたが、その場にいた人が全員あの行動はおかしいと言っていました。

ミエミエの行動。

「あんたら自分は被害者だって言うのなら従業員全員ここにこないといけないと僕は思うんですよ！」

もう止まらない。

言わせてもらう。

「それがたったの4人？僕はもう4・5人いるのを見ましたよ！」
静かだ・・・

喫茶店の人がオロオロしてえう。

「結局自分の保身のためじゃないですか！自分は悪くない！被害者だ！給料もらってない！」

一人一人指差しながら。

「おかしいでしょう！株式ではなかったことをあんたらは知ってたんでしょ？それを棚に上げてその主張はおかしいでしょう！」

ここまで言わせたのはあのハゲの行動ですよ。

そこんとこわかってますよね。

「僕から見たらあんたらも同罪ですよ！組織ぐるみですよ！だってら組織で金を回収させろって言いたいですよ！あんたらが払えって

ね！」

少しだけ息を吸う。

「僕の言ってる覚悟というのは・そういうことですよ！自分の意見を主張したいのなら触れられたくない所も触れられる覚悟があるのかっていうことですよ！」

誰も反論しない。

してこない。

だが彼らの目の奥にある怒りに満ちた視線が突き刺さる。痛くないですけど。

「僕は言いますよ。このことは。皆知ってたってね！その時の覚悟はあるんですか？」

当然「ある！」という奴はいるわけなく。

なんか雰囲気悪い感じになった。

なんだよ！

僕が悪いのかよ！

最終的にその「覚悟」に誰も何も答えてくれず。ダラダラした話に戻ってしまった。

僕はもうここには用はないと一足先に店を出た。これからどうするのか。

足並みを揃えるのか。

それとももう全て諦めて関わりあわないようにするのか。上司に報告します。

あの後。

僕の怒りがとてつもなく見えたのでしよう。元秘書から電話がありました。

僕の怒りの様子を伺ってみる電話でした。その時にはある程度頭冷えていたので。

普通に大人の対応をしました。

まあ・優しい言葉使いだけで、内容はあの時怒った内容と同じですけどね。

そんな心配するのならやるなよ！

それにしれも・・・あのハゲ！

実はこの日の夜・どうにもこうにもムカつくのでハゲに深夜電話して。

当然留守電だったのですが。

今日の出来事の不満を言ってしまいました。

かなり言っただけだね。

挑発的なことも言ったし。

だけど・後日・・・折り返しの連絡は・・・こない。

そんな奴か。

混乱編その1

その日の夕方。

僕が社内でも今後の動きや業務で居残っていた時。

1通のFAXが届いた。

それは僕も見ただことのある内容の文書だった。
嫌な予感がする。

2代目怪しき会社からである。

「怪しさその28」の時に2代目はある書類を会社に持ってきました。
た。

上司が突っぱねた時の書類です。

以下の文章は「その28」で、その時の状況です。

奴は書類を出す。

それは全然駄目な内容です。

会社に出す書類というのは、これからの返済計画。

「この日までにいくら返します」ということを書いて初めて会社に提出できるんです。

その内容をOKするのは、それからの話なんです。

奴がもってきた書類は結局世迷言を文章化しただけで具体的なことは何一つ書かれていません。

つまり「報告書」なんです。

(その28より)

2代目は・・・。

その「報告書」をFAXしてきたのです。

っ!!

しまった。

迂闊だった。

実はこの「報告書」の存在を皆の前で話したのは・・発表したのは・・。

僕なんです。

情報として皆に言ったつもりなのに。

恐らくこれを各社にFAXしたのだろう。

これで僕の持っている情報は皆の共通の情報となり、何の効力も示さなくなったのです。

本当に迂闊だった。

喋るのではなかった。

その内容がどうこうではないですけど。

結果的には何の効力はないですけど。

少なからず僕以外の数人しか持ってなかったはずです。

それを皆が持つことになる。

情報として足並みが揃うのです。

ある意味時間稼ぎのつもりかもしれませんが。

僕のミスです！

情けない！

全く持って馬鹿です！

アホです！

最悪の30歳です！

被害者の会があった当日に・・・。
FAXを流すのですか？

出来すぎだ。

つまり・・・。

この会に出席した人の中で・・・。

情報を漏らした奴が・・・。

2代目に情報を漏らした奴が・・・。

・・・いるっ！！！！

つづく。

混乱編その2

よくよく考える。

思い出す。

あの時・・・従業員もいたが・・・。
業者だけだということで追い出された。
その後・・・呼び戻されることもなく・・・会は終わった。

やはり・・・出席者しかない。

僕が「報告書」の件を発言したのもあの場だけだ。
僕だけだ。

僕だけが言ってるんだ。
みんなは僕の話に耳を傾けていた。

その後の僕がキレた喫茶店では一切その話はしていない。
怒ってギャーギャー騒いただけだ。

やはり・・・おかしい。
タイミングが良すぎる。

僕が喋った当日にそのままのFAXが送られてくるなんて。
推測する。

誰かが2代目に連絡していることは間違いない。
スパイがいることには間違いない。
僕はそんなことも知らずにうっかり調子に乗って「報告書」の情報

を話してしまう。

それを聞いたスパイはその書類が存在することを知らなかった。
急いで2代目に報告。

なんで一部の会社にそういうものが出回っているのかと。

2代目も慌ててFAXを各社に送る。

しかし、話をしていたのがどこの誰かわからないからウチの会社にも同じものが届いたということか。

目的はなんだ？

日付を見ると2代目が会社に来た日になっている。

過ぎた日付の物を送ってきているのです。

そんなものが送られてきたからって何の意味がある？

目的は・・・やはり・・・時間稼ぎ。

それもあるだろう・・・。

それと・・・情報の・・・足並みを揃える・・・。

全員が知ってる情報にするということ。

これで一部しか持っていないこの「報告書」の意味はなくなったよ
うなものだ。

本音を言えば日付を過ぎている物のどこに価値があるんだ？

しかし・・・その問題も含めて・・・。

もう一つの問題は・・・間違いなく・・・スパイは・・・いるというこ
とだ。

スパイ・・・。

誰だ？

誰だ？

誰だ？

そんな怪しい奴はいたか？

変な行動した奴はいたか？

途中で抜けた奴はいたか？

いた。

3〜4人いた。

でも・・・僕もその中に入っている。

誰だ？

誰だ？

誰だ？

誰かが2代目と繋がっている。

パニックに陥った。

もう誰も信用できない。

できるわけない。

全員が怪しく見える。

そうだ！

FAXが送られてきた時に必ず上の方に送り主の電話番号と名前が
ではずだ。

書類を見る。

まず印鑑がされていない。

その時点で成り立たないだろうこのFAXは。

そして・・・送り主の電話番号・・・と名前が出ていた。

その名前は・・・。

今まで僕の情報に入ってきたことのない・・・名前だった。

誰なんだ？

こいつは？

僕は電話番号を見ながら携帯でかける。

出ない。

切り替わる。

留守電とFAXの兼用だ。

今日はもう止めておこう。

一体誰なんだ？

この電話の主は？

何を思ってFAXを流したのだろうか。

2代目との関係はなんなのだろうか。

いや・・・それよりも・・・。

一番最初に思ったことは・・・。

今のこの状況で新キャラは出てこなくていいですから!!

混乱編その3

週明けて。

まず送られてきた謎のFAXに関してやらなければいけないこと。
電話番号とカタカナの名前を頼りにできるだけのことでしょう。

電話帳・・・で調べる・・・。
ない・・・。

載ってない。

ネット・・・。

出ない。

やはり自宅なのか。

色々調べた結果。

ある程度の地区までは確認できた。

その後の情報がわからない。

もう一度電話する。

出ない。

しばらく何度かかけるが出ない。

一応元従業員達にも聞いてみる。
皆知らないという。

元秘書はそのFAXを見せてくれと。
また後で見せよう。

今はそれどころではない。

そのまま電話を切りかけたとき。

・・・。。。。。

何かを思いついた。

これは・・・天使の閃きか。

悪魔の囁きか。

僕は元秘書と早急に会うように話をする。

近くの喫茶店で会うことに。

僕が何をしようとしているのか。

今回の件は・・・会社全員のグルだと思っています。

・・・ということは「元」だろうが、何だろうが従業員も同罪です。

・・・この回収・・・。。。

・・・従業員から・・・。。。

・・・取ることは・・・。

・・・できないだろうか・・・。

どうだろうか・・・。

筋が違うかな。

今考えると僕のやり方は間違っていると思うのですが。

当時の僕はもうそんな違うだとか考える余裕はなかった。

元秘書に払わせよう・・・。

この言葉が頭の中を巡って。

心に誓ったのだ。

喫茶店で先に待っていたら元秘書が現われた。

彼の目的は情報交換と、このFAXを見せるためである。

「ああ・・・どうも」

向こうは少し緊張気味である。
キツイ言い方したのを気にしているようだ。

「どうも・わざわざすみません」

早速・FAXを見せる。

「なんだ・・・これ・・・？この名前・・・知らんなあ」
困惑した表情の元秘書。

身に覚えのない名前らしい。

ではなぜFAXにこの名前が記されているのだろうか。

「ちよつと調べてみるわ」

彼はメモをする。

「これって・・・あの会の出席者の中で誰から奴に繋がっているんですよ」

「そうなるよな」

「誰か心当たりいますか？」

「・・・んゝ・・・」

元秘書は考え込む。

どうやら怪しそうな奴は一応いるのだ。

しかし根拠も確信もないので報告する段階ではないのだろう。

話を変えよう。

さあ・・・ここからだ。

「結局、僕はもう今回の件は何度も言うようですが皆同罪ですよ。」

突然の強気の言葉に元秘書は驚く。

「だってもう詐欺の片棒を担いでいるじゃないですか」

「いや・それは・会社を良くしようと思って・・・。」

「でも・いくら良くしようとしたって・悪いことしたらいけないじゃないですか」

「アンタだってそういう状況に陥ったら絶対にやるはずだ！」

「いや僕はやりません」

本音である。

やるわけがない。

「何もかも知ってたんですから！それを止めることもなく続けていたんでしょ」

株式会社でもないのにずっとそれを記載されている名刺を従業員全員がわかって使っていたこと。

「このまま事件になったら僕も発言せざるを得ないですよ」

「う・・・。ん・・・。」

「僕はもうこの件から手を引きますからアンタが払って下さいよ。後で奴（2代目）に請求すればいいじゃないですか」

本当に訳のわからないことを言っていると後になって思いました。

同罪だという考えはあくまでも僕の考えですから。

事件になった場合、その最終的な判断は警察がするんですよね。

なのに僕が裁いているような感じになっている。

しかも2代目からはもう回収不能を諦めて従業員に払えと言っている。

元秘書からしたら「何を言ってるんだ？」と思われても仕方がない。

それでも僕は必死なんです。

焦っているのです。

他でどう罵られても自分の回収だけが大事なんです。

「ねえ？お願いしますよ」

元秘書は溜息ついて。

「アンタも結局は自分のことしか考えてないんだね・・・」

「当たり前だ！！」

僕は叫んだ。

自分の中でも間違いだと思っていることを叫ぶことによってごまかしている。

元秘書は呆れて（僕にはそう見えた）席を立て逃げようになくなった。

あゝこの喫茶店にはもうこれない。

恥ずかしかった。

僕は後悔した。

情報源を失くした。

やはり・・・間違ったことだったのか・・・

今日は何もする気が起きない。

ストレスが溜まっていくのが自分でもわかる。

思い出したように例のFAXにあった電話番号にかけてみる。
すると・・・。

「もしもし・・・」

男の人が出た。
新キャラだ。

こんな心境と状況であるが・・・。
聞き込み開始である。

つづく。

混乱編その4

電話に出てくれた方がいいが・・・。
何を話そう。

最初から説明するのは面倒くさいなあ。

いや・その前に様子がおかしい。

電話の男は明らかに動揺している。

僕は自分の身分を包み隠さずに打ち明ける。

「実は今日何度も何度も色んな所から電話がかかってきて・・・
これを聞いて真っ先に思ったのは・・・「なんか怪しい。」
モチロンこの発言に。

これまでの経緯を簡単に説明する。

FAXが送られて、そこに電話番号と名前が出ていたこと。

「そうらしいですね」

他の業者にも聞いたのだろう。

既に知っていた。

「でもね・・・ウチ・・・知らないんですよ」

「そうなんですか？」

「なんでももうわからないだよ。もう困ってね」

「失礼ですけど・・・ここは普通の・・・」

「家ですよ」

「そうですか・・・差し支えなかったら住所教えてくれますか？」

「いいですよ」

怪しいと思うのだが・・・演技しているように聞こえないし・・・協力してくれてる。

地図で調べると間違いなくあった。

「どうして・・・貴方の家の番号が狙われたのですか？」

「それがさっぱり・・・」

「この名前とか知りませんか？」

僕は2代目の名前とその関連の名前を数人言う。

しかし・・・ヒットすることはなかった。

「すみませんでした。また何かあれば電話します。それとこれから似たような電話が他からもいっぱいかかってきますので」

「わかりました」

「失礼します」

うとうう。

怪しいのだけどなく。

わからないよう。

違う場所から人の番号を使ってFAXを送ることなんて可能なのか？

可能なのだ!!!

後で知り合いの電気関係に強い人に聞いたところ。

可能だという。

それも非常に単純なやり方で。

誰でも知ってる常識のようだ。

その方法はここには書きません。

誰でも知っているそうです。

僕は知らなかった。

自分が裏づけしてないのでどうも信じられないが。

その方法ならば・・・知らない電話番号を使ってFAXすることが出来る。

それと・・・あんなやり方があるとはいえ・・・僕はあの家もまだ疑っています。

口裏合わせるくらいでできだろう。

さて・・・。

何もかも動くことはなくなった。

あとは・・・皆と足並みを揃えるだけだ。

今までも動きも情報としてはかなりの量を持っているが。

成果としては・・・全くのゼロである。

営業も数字命。

数字がなければそれまでもプロセスがどんなに素晴らしいものでも意味がないのだ。

それにしても……。

スパイは……一体……誰なんだ……？

時間だけが過ぎていく……。

瞬間……嫌な推測が思いつく。

根拠がない。

可能性としては間違いなく低いはずだ。

しかし……。

しかし……ゼロではない。

「あの人」は今回の2代目の出資者である。

「あの人」が一番2代目のことを知っている？

「あの人」が積極的に動く。

それは？

何か調べられるとマズイことがあるのか？

それを……積極的に動くことにより……。
ごまかす？

僕は今とんでもない想像をしている。

あの被害者の会の中で。

元従業員とも連絡がとれて。

初めから2代目怪しき会社の状況を見ている。

「あの人」・・・・・・。

初代・・・・。

僕の正常だと思っていた思考回路は粉々に崩れ去っていくのがわかった。

混乱編その5

そもそもこの展開を考えなかったのがおかしい。
今までのことを振り返ったら疑問も出てくるはずなのに。
そこが僕のまだまだ甘いところなのだろうか。

だが・・・疑い始めたらきりが無い。

実は全然違う人を疑ってたんです。

よく喋る人がいたんですよ。

なんか怪しいなうって思ってたんです。

でも・・・今の僕の思い込みに勝てるわけは無く。

初代が・・・？

そんな物騒な展開を考えている僕。

反省します。

確かに今回の件で人を信じられなくなったのは事実ですが。
疑ってばかりもいけないと思います。

実際・この件で頭になって動いているのは初代なんですから。
それに関して、誰も反対もせずに承諾したのですから。

仮に！

仮にそうだったとしても。

今は僕一人で追求する状況でもなく。

証拠もないわけですから。

僕の妄想だと思ってしまう。

ぞして。

僕の出した一つの結論。

正式に。

みんなと。

足並みを。

・・・揃えることにしました。

色々考えた結果。

・・・僕も参加します。

現時点ではこれが最善と判断しました。

回収できなかったことが悔しいです。

だけど仕方ありません。

これ以上は僕の力量では対応できません。

あれだけ動いて成果ゼロなんですから。

人に頼るしかないのです。

参加の承諾を会社からもらって。

サブで仕切っている人にFAXを送る。

これで足並みを揃える。

後戻りは出来ない。

抜け駆けも出来ない。

あとは告訴に向けて話が進んでいくだけです。

さて。

今までは少し休憩しながらも何かと話は進んでいたのですが、
本当に現時点まで追いついてしまいました。

今現在がこの状況なんです。

足並みを揃えて・そこからの動きを待っている状態です。

皆さん。

長い間・連続の更新にも関わらず、読んでくれてありがとうございます。
ます。

励ましの言葉や応援ありがとうございます。

この「怪しき会社」シリーズ。

ホントにしばらくの休演となります。

準備が出来るまでなのですが。

こういうのは時間がかかりそうですね。

これからはこの混乱編が続くのか。

もしかしたら・そのまま告訴編へいくかもしれません。

その時はまたお知らせしますね。

明日からは思い出したように馬鹿日記書きますから。

これからもよろしくお願いします。

ではこれにて・・・一旦・・・休演です。（拍手喝采）

推理編

「おい。聞いたぞ。お前なんか元社員を脅したそうだな」
珍しくかかってきた初代からの電話は何処から聞いたのかいきなり
確信ついた一言で始まった。

脅したというのはなんとも人聞き悪い話で。

会社の責任は社員（取締役）の責任という考えをもって、2代目が
捕まらないのなら社員が払えと言っただけですよ。

詳しくは「その39」を参照してください。

まあ・そのことを脅しと言われれば・・・そうなんでしょうけど。

僕は自分のその行動に関しては若干の後悔はあります。

なぜならその社員とはもう連絡がつかなくなったからです。

こちらから電話しても出ない。

明らかに嫌われた証拠です。

取れるなら何処からでも取れ！などという物騒な思考回路だったた
めです。

そんなことよりもその情報が初代の耳に入ってることの方が問題な
のではないでしょうか。

誰が言ったんだ？

もちろんあの元秘書でしょう。

・・・ということは初代と元秘書・社員は繋がっているってことですか？

それはなんか妙じゃないですか？

僕達からしたら言うなれば最大の敵は2代目ですよ。

しかし、何もかも知ってて動いていた元社員もある意味敵ですよ。その敵と会っていたということですか？

なんのために？

ただの情報交換であって欲しい。

僕は今・変なこと考えています。

それは以前脳裏に浮かんだことと同じことです。

初代もまた重要な存在として絡んでいたのかということ。

色々調べられるとマズイことが出てくるので積極的に行動している・
・「フリ」をしている。

「え？脅してないですよー誰から聞いたんですか？」

「お？そりゃあ・あいつからよ（元秘書の名前を出す）」

「脅すなんてしてないですよ。確かに彼らにもムカついているから・
言い方がキツ
イ感じになったかもしれませんけど」

「なんか金払えって言われたとか言ってたぞ」

「まあ・本気ではありましたけど・・・それよりもどうしてその人と
？」

「お？まあ・今回の件で色々聞きたいことがあったの・・・」
急に歯切れが悪くなった。
聞かれたくないことなのだろうか。

「今どうなってます？みんな経過を気にしていますよ」
嘘である。

被害者企業の誰にも連絡していない。

「忙しくてなく。まだ動いていなんや」

何か閃く。

それも確信めいた閃きだ。

もう1ヶ月経とうというのに。

まだ動いていない。

それは初代と2代目が裏で繋がっていることになるのではないか。

無理がある考えかもしれない。

本当に忙しかったのかもしれない。

だが・2・3日ならともかく。

1ヶ月動いていなくて。

元社員とも会う。

そっちの可能性を考えない方が馬鹿である。

先頭に立ったのも間違いなく僕達を抑えるためであるならば・・・それは大成功じゃないですか。

今度またお伺いすると伝えて電話を切る。

確信は僕の中にはあるが証拠はない。

・・となるとやはりしばらくは後について行くしかなさそうだ。

違った視点を持って静かに流れが変わるのを待つしかない。

ただ静かに・・・・・・・・。

石のように・・・・・・・・。

辛抱強く・・・・・・・・。

があああああっ！！！！
待てるかっ！！！！

早く動け!!!

疑惑編その1

「怪しき会社」シリーズ最新作。

疑惑編。

堂々と開演です。

やはりおかしい。

被害者の会が作られてもう2・3ヶ月経つ。

その間に何度も僕は初代の元に訪れた。

返ってくる返事は・・・「忙しい」

僕の悪いクセである先延ばしよりも酷い先延ばしはなんなのだろうか。

僕は以前咄嗟に考えて後悔したことを思い出す。

「初代」と「2代目」が繋がっている。

自分に不利なことを出させない為に被害者の会で頭になって動くということにした・・・。

疑いだしたらキリがないし・疑いたくない。

一応仕事も貰っているし・毎月の振り込みもちゃんとある。

お伺いする度に疑惑の目を向けることになるのは正直辛い。

・・・。

ひょっとして・・・。

この貰った仕事・賄賂じゃないだろうね。

「仕事やるから余計な詮索はするな」

・・まさかね。

ただ僕だけじゃない他の賛同した会社もどうなってるか心配なはずだ。

当時被害者の会で約25社が出席。

この時の会を開催すべく動いたのは僅か8万の延滞で動いた会社だ。

仮の名でこの会社のことを「8万会社」と呼びます。

話し合いがもたれ・最終的に「初代」が頭となって告訴への手続きを行う。

サポート役としてその「8万会社」が就任した。

それに賛同した会社は正確には知らないが20社はいるであろう。

まだ何も動いていないということは賛同した20社を裏切っていることになる。

僕はお伺いする度に聞いている。

「どうなりました？例の・・やつ」

「おうおう・あれなく今忙しくてなくよう動けんのじゃ」

こんなやり取りが何回か続いた。

だがこのようなことを他でも言われたのであろう。

「初代」は遂にその重い腰を上げることになった。

その日「初代」は「8万会社」と打合せをすべく僕の会社近くまで出てきていた。

打ち合わせ場所が近いということ。

僕は僕で上司に突かれているのでその打合せに顔を出した。

最初打ち合わせ場所は「初代」もよく行っている喫茶店だったのですが・僕が別の場所を提案。

前回元社員を怒鳴ったところだったんで。

非常に行きづらい。

てゆくか2度と行きたくないリストにノミネートされています。

知っている弁護士に告訴を依頼しようと「初代」は決めていた。

そのための資料として各社に被害金額や意見などを書いた書類を提出しているのだ。

保管しているのは「8万会社」である。

「初代」は弁護士に見せる資料としてその書類を貸してくれと指示した。

だが。

返ってきた返事は。

「こういった情報はお見せできない」

はあ？

え？

え？

どういふことですか？

つまりは・この会社も・僕と同じ考えに行き着いたのだ。

「初代」と「2代目」の繋がり疑惑・・・。

「初代」も呆氣にとられた表情で。

話が違う方向を向いている。

「2代目」をなんとかするんだろう？

いくなれば被害者同士・身内ですよ。

こんなところで揉めている場合ではないでしょ？

僕は一緒にこの場に出たことを後悔しながら。

更にはこの被害者の会に参加したこと自体にも後悔を感じていた。

つづく。

疑惑編その2

確かに僕のこの「2代目」と繋がっている考えはナカナカ捨てきれない説ではあるが。

だからといって確信はないのですから。

モチロン「8万会社」の気持ちはわからないでもない。

だがあまりにも露骨すぎやしませんか？

「それはどういうことよ」

初代は低い口調で言った。

「ですからこういうのは大事な書類ですからお見せできないんです」
怯まず向こうも言う。

でも「8万会社」はこの情報見てるんだろう？

自分は見えて人に見せれないってそれはおかしくないですか？

「それがないと弁護士に資料として話ができんじゃないか」

初代の肩を持つ訳ではないですが・いやまったくその通りの意見でしょう。

完全に「2代目」と繋がっているわけではないのですから。

全くその件については譲らない「8万会社」に業を煮やした「初代」は。

「別にワシがせんでもいいんじゃない」

うおーい！

いきなり何言い出すんだこの人は。

勢いとはいえ・それはまた話が違うでしょ？

各社からも含めて皆から任されてるんですよ。

それをいきなり辞任って……。

「ちよっ・ちよっとそれはそういうわけにはいかないですよ
慌てて僕も止めに入る。」

「確かに情報を渡せないというのはどうかとも思いますけど
ここは一言いっておかないといけない。」

「何かあったんですか？ぶっちゃけましょうよ。今の状況は社長（
初代）のことが信用できない言い方ですよ」
これは僕の意見も込めて言っただけです。

遠まわしに届け！

僕の思い！

いや・ついでに言っしまえ！「8万会社」

もう言え！

言うんだ！

「別にそういう訳では……」
煮え切らない「8万会社」

ああっ！

もう！

イライラする！

言えよ！

2代目と繋がっているんですか？って！

貴方が信用できない！って！

僕の代わりに！

だが確信をついた言葉は出ない。

でも「渡せない」とまで言ったのだから全部言えればいいのに。
そこまで言ったのならもう理由はそういうことでしょう？

「初代」も感づいているとは思うけど。

結局このまま進展せずに話は終わる。

とにかく「初代」の知り合いの弁護士に聞いて告訴状を作成することにした。

資料は貰えなかった。

貰えないというのが納得いかない。

だって「8万会社」は僕らの情報を見てるわけですからね。
それはどうなん？って話ですよ。

「初代」がちゃんと弁護士を立ててくれるのかどうか怪しいもんですが。

待つしかありません。

つづく。

疑惑編その3

上司からは毎日のようにすごい集中攻撃をくらっています。

「どうなったんや」

「いつになったら話は進むんだ」

「おかしいじゃないか」

「あれは（2代目と）繋がってるぞ」

「言えや！どうなってるんだって」

・・・そうそう言えるわけないでしょう。

一応お客様ですよ。

しかも仕事も頂いてて。

入金も今のところはある。

今のところはね。

それはそれ・これはこれの考え方もありますが。
そんなことくらい分かってますよ。

そりゃあ・上司から見たらそう思うでしょう。

でも現場の人間から見たら・難しいモンなんですよ。

まさに。

「事件は会議室でおきてるんじゃない！」

・・・ですよ。

「もう俺が行く」

上司も息巻いて言ってます。

うーん。

揉めたくないなので本音は行って欲しくないのですが。

ただ弁護士を使うと言っているのだからそこだけは聞いておかないといけない。

先日の話から2週間くらい経って。

音沙汰なし。

まあ元々連絡をするような人ではないが。

僕から電話してみる。

「おうおうおう」

「・・・どうも」

簡単に仕事の話をする。

いつもなら僕から振らないと告訴の話はしないのだが・今回は向こうから言ってきた。

そういう普段と違うことがあると大抵良くないことなんですよね。

「実は困ったことになってな・・・」
ほらぁー!!!!

「弁護士に相談したんじゃ」

「ええ。」

「そしたらな・金をくれって。」

「えっ・・・？」

「金をくれないと受けれないって言うんじゃない」

「そっそれは・・・」

それはマズイですよ。

なぜなら。

被害者の会で質問が出たんですよ。

「この動きに伴って費用はかかるのか」と。

初代ははっきり言いました。

「費用はかかりません」

今更「お金いるんです」・・・は揉め事になりますよ。
不信任も募りますし。

「まあちよっと考える」

それが6月16日木曜日の話。

さあ・・・どうなるんですか？

僕としてはそんな内輪の話より・・・。

自分のとこのお金が当然大事なんですけど。

まだまだ続くな・・・このシリーズ。

もう僕のレベルでどうこう言えなくなってますよ。

一旦休演・・・ではまたすぐにお会いしましょう。
もはや・・・僕・・・どうしていいかわかりません。

確信編その1

毎日のように上司に聞かれる。

2代目のこと。

初代の告訴の話。

いい加減うんざりしているハンサムの僕です。

なんかあの時の怒りは何処へやら。

時間ってすごいですね。

人間って都合の悪いことは忘れることが出来る生き物なんですね。

正直・僕の中にも「諦め」という言葉がちらついています。

一言で片付けるのなら・・・「面倒臭い」「疲れた」

そんなところですよ。

結局これは2代目の勝ちになるんでしょうね。

逃げ切ったと・・・。

僕が許せないのはそこなんです。

もうお金のこととは今更無理だと思ってしまう。

それよりも2代目ですよ。

奴がまだのうのうと暮らしているということが気に入らないんですよ。

どこか他所の県にでも行ったのか・わかりません。
お金のことより・・・なんとかして奴を懲らしめたい。

僕の気持ちはそこなんです。

だって・・・ここで逃げ切れることがわかったのなら。

2代目は必ず同じことを繰り返しますよ。

そしてまた僕のような思いをする人がどこかにいるということになるじゃないですか。

それは・・・。

もしかして・・・。

これを読んでいる・・・。

貴方かもしれない!!!!!!

ばばん!

先月の16日の出来事から(その45)・・・7月に入りました。

僕は初代には一切連絡してません。

上司には何度も何度も言われますが。

「電話してます」「忙しくて話してません」と誤魔化しています。それもそろそろ限界に近づいています。

この度。

全然違う用件で上司と動くことになりました。

なんと・・・行く場所は・・・。

初代の会社の近くなんです。

おいおい・・・これはマズイですぞ・・・。

僕は上司と初代を会わせたくないんです。

確かに上司に振って・僕自身逃げ出したい気持ちでいっぱいですが

ど。

今の勢いだと揉めそうで嫌です。
喧嘩になりそうです。

・・・とはいっても僕よりも人生経験豊富で海千山千の人達です。
腹の探り合いで終わってくれれば・・・。
でもここは会わせないに限る。

だが。

嫌な予感が脳裏を過る。

僕はすごい遠回りのルートで目的地に行こうとしていました。

上司の突込みが入る。

「どこ運転しとんや。遠回りじゃないか。この道走れ」

「・・・・・・・・はい」

いきなりの駄目出しで僕の計画は脆くも崩れた。

行く手の左側に・・・。

ああ！

初代の会社だ！！

やっ・やばい！

そうだ！

やるしかない！

アレをやるしかない！

効くか？

この技があの上司に効くのか？！

いつ・・・今だ！！

「あっ・あれ・知り合いの会社じゃないですか？」
僕は右側に建ってある看板を指差した。

まんまと上司は。

「うーん・・・あんなのいたかな」
僕の必殺技に引かなかった。

必殺！あっちむいてホイ！作戦！

炸裂！

いえーい！

どうだ！

こんな子供騙しに引かかるなんて！
アンタはお馬鹿ですか？

そのまま目的地に着いて。

商談も終了。

その帰り・・・。

「おい！あれ（初代の会社）じゃないか！」

しまったあああああゝ！！！！

そうですよ。

「行き」があるということとは！

「帰り」もあるんですよ！

「寄れ！寄れ！」

上司は息巻いて叫んだ。

もう逃げられない。

僕はハンドルを切った・・・。

つづく。

確信編その2

まさかこんなことになるとは・・・。

まさかこの会社上司と一緒にいくことになるとは・・・。

最悪の状態を覚悟した僕はハンドルを切って会社の駐車場に入ってしまった。

幸運にも。

駐車場には初代社長の愛車がない。

よし！

外出してる！

いいぞ！

これで名刺だけ置いて帰るという流れに持っていくぞ！

余計なこと言うなよ！
僕！

「あゝ社長いませんね」

「そうか？」

「はい・車がないですから」

上司は会社の中をチラリと見て。

「女がいるな」

「あっ・あれは奥さんですよ」

「よし・じゃあ挨拶行っとう」

ぎゃああああ！！！！

余計なこと言っただあゝ！！！！

「さあ・・・？」で良かったじゃんよ！
なんで身内だって言うんだ！

馬鹿か！

僕は！

でも。

ここでも良いことが。

奥さんは今回の件・話は聞いているけど・一切関わってないんです。
これは間違いない。

むしろ奥さんは2代目のことを既に怪しいと思ってて。
初代に警告していたそうなんです。

そうになると奥さんからしてみれば「私があれほど言ったのにこの人は・・・」って思いですよ。

従って・上司が何言っても進展はないんです。

「どうも！」

僕は元気よく挨拶。

「あらゝ久しぶりゝ」

「今日は近く寄ったので来ました。上司とたまたま一緒だったので・」

「どうも」

上司は奥さんに名刺を渡す。

「今日は出てるんですよ」

よし！

いいぞ！

このまま帰ろう。

帰ってしまおう！

僕がほくそ笑んでいると。

車が1台駐車場に入ってきた。

あ・・・。

あああああ。

「あら」

奥さんは言う。

帰ってきたあああああゝ！！！！

さ・・・最悪の展開。

「おうおうおう・・・」

いつもの口調で初代は現われる。

僕を見て一瞬だけ上司に視線を寄せる。

そして・・・ニヤリと笑う。

きっと初代はこう思っているはずです。

（遂に連れてきたのか）

お茶が出され。

一応仕事を貰ってますから。

お客ですから。

「いつもお世話になっております」

世間話から入る。

腹の探り合いが始まった。

つづく。

確信編その3

先に言っておきますけど。

ここに出てくる上司はいつも文句言っている上司は別の人です。もっと上の人間です。

だから・僕も素直に言うこと聞いているんですよ。

世間話が続く。

最近忙しい話。

頂いた仕事の話。

お互いが・・・どこで2代目のことを切り出そうか考えているようである。

口火を切ったのは初代だった。

「おうおう・・・あいつ（2代目）のことだけどのう・・・」

「はい」

僕は始まったと心の中で呟いた。

「今な・告訴するために動いてるんや」

初代は上司の顔を窺いながら言った。

「あいつ（2代目）だけは許さんからの」

その台詞・・・。

もう何ヶ月も聞いてますけど。

僕の疑問はただ一つ。

初代が2代目と繋がっているのではということ。

これがもし本当の話になるのなら。

僕は単に踊らされていただけになります。

こんなに間抜けなことはありません。

自分が情けなくなりますよ。

「ただな」

初代は話を続けた。

「俺がな。あいつ（2代目）と繋がっているとかいふ奴らがおるんじゃない」

あ・・・言っちゃったよ。

てゆくか・・・他にもいたんだ。

そう思ってる人。

でも全然驚きません。

当然の流れですからね。

ここで上司が動いた。

いきなり脚を組み（わざと）横柄な言い方で。

「そりゃね・誰も思いますよ。今までの状況を見れば」

ええええええええ！

いくらなんでもそんな！

ストレートに！！

喧嘩を売るような言い方・・・。

だっ大丈夫ですか！！

初代は片手を振りながら。

「いや・いや・いや違うんだ！それは絶対にない！ホントそれだけは絶対に有り得ない！！」

心外だと言いたげな表情で初代は説明し始めた。

2代目と知り合った経緯。

出資したといっても・ちゃんと借用书を書かせていること。騙されてからの動き。

話を聞く限りは初代と2代目は繋がっていないように思える。

そこから初代のペースになったのか話が全然逸れてしまつて。

上司もうまく話しに入りながらだが核心を突くことができない。

これは大人の会話。

腹の探り合いの状態になった。

喧嘩になるんじゃないかと思つていたのですが・このまま終わりそうなのこの感じ。

上司の紹介も出来たし・これはこれで良かったのでは・・・？

そのまま話は終了。

僕らは初代の会社を後にした。

「結局な・・・」

上司は車が発進して少ししてから口を開いた。

「もう駄目だな」

「えっ？」

「金は返ってこんよ」

上司は確信持って言つた。

うゝう。

確信編その4

「多分だが・・あいつ（初代）と奴（2代目）は繋がってるよ」
上司は言い放った。

「ええ？」

あの世間話の中でなぜその結論に至ったのかわからないが。

上司の長年の経験なのか・・自信を持って言った。

「・・・で。結局は皆まで言わなくてもわかるだろ？もういいじゃないか。だから注文やっただろ？・・・ってことだろう」

「そうなんですか？」

全部真相は知ってるのはわかるから・・もういいじゃないか。そのために大きな仕事をやっただろ？と初代は遠まわしに言ってるというのだ。

つまりそれは2代目との繋がりを認めたことになる。

「話の中で古い街中のビルを買い取ったとか言ってただろう」

「はい」

そういえばそんなこと言ってたっけ。

なんでも安くビルを買い取ったとかなんとか。

僕には自慢話のように聞こえていたが。

市内の街中にあるボロボロな3階建てのビルを安く買い取ったらしい。

場所も言ってたな。

「そこ行ってみろ」

僕にそう命令したまま上司は黙ってしまった。

後は話すことといえど・世間話程度の全然違う話だけだった。

そして。

後日・・・。

言われた通りにそのビルへ行った。

街の飲み屋街の端にビルはあった。

薄暗い・・・。

誰も近づく者はないだろう。

人通りも少なく・いや誰も通っていない。

古い・ボロボロの・ビル。

誰が使うのか・・・。

よく買い取ったな・こんな・モノ。

そのビルの中に店がある。

なんとスタンド・飲み屋だ。

こんな所にでも安らぎを求めて飲みくる常連がいるのか。

普通に考えると間違いなく近寄ることはないと思うが・・・。

こういう店でもやっていけるのか。

ここだけかと辺りを見回す。

すると・・・。

もう一つ。

看板が出てる。

名前にコーポレーションと付け足してある。
見るからに怪しい社名だ。

「A（名前）コーポレーション」（仮）

小さい看板が・・・立ててあった。

・・・

・・・

その「A」という名前に・・・。

少なからずの違和感を感じる。

僕は・・・。

見覚えが・・・。

ある・・・。

そう・・・。

・・・その名前は・・・。

・・・2代目の・・・。

・・・名前だった。

うへう。

破滅編その5

こんな展開。

信じたくはない。

でも・・・もしかしたら・・・、
まさかとは思っていたが。

現実として目の前に現われると・・・。

混乱する。

どういうことだ？

どういうことなんだ？

気分が悪くなった。

気のせいじゃない。

このモヤモヤ感はなんだ。

イライラ感はなんだ。

「世の中こんなもんだ」という・いつかの上司の言葉。

僕が甘すぎるのか。

純粹すぎるのか。

疑うことを知らないお子様なのか。

初代の持ちビルに2代目が・新しい会社名で入っている。

これではつきりした。

繋がっているんだ。

初代と2代目は繋がっているんだ。

僕は上司に連絡した。

全てを見透かしていたのか「やっぱりな」という返事。

それもわかった上で何も言うなと初代は上司にあの日遠まわしに言っていたのだ。

言葉の本質を理解していた上司はだから言ったのだ。

「金は返ってこんよ」・・・と。

初代は自分が金を払ってでも告訴状を弁護士に頼むと言っていた。
だが罰するべき人間は自分のビル内にいる。

告訴はポーズなのですか？

言ってるだけなのですか？

騙された方が悪いのですか？

こんなことが日常で当たり前なら。
当然なら。

僕は一体何を信じればいいのか。

「Aコーポレーション」に念のために入ろうと上司に言ったら。

「やめておけ。まともな人間はいないぞ」
確かに・・・。

僕は入るの止めて。

重い足取りでその場を離れた。

覚悟はしていたものの。

違うという気持ちの方が強かったのだろう。

初代のことをどこかで信じていたのだろう。
信じていただけにショックも大きい。

擦れ違う人間が仮面を被っているように思える。

幻聴か。

初代と2代目の笑い声が聞こえているようだ。

その声を僕は背中に感じながら二度と近づくことのない薄暗いビル
を後にした。

完

あとがき

皆さん・長々と読んでくれてありがとうございます。
途中で断念した人もありがとうございました。

これにて「怪しき会社」終了となります。

非常に納得のいかない、やりきれない終わり方でご不満の人もある
ことでしょう。

今までのあの動きはなんだったんだということです。

それを一番感じてるのはもちろん僕自身です。

告訴としての動きはまだ続きますが、回収という件は諦めること
になります。

これ以上お金が回収できるかどうかわからないよりも新しいお客を
探した方が良いという判断です。

残念ですが、打ち止めです。

今回の件でとても思ったこと。

「正直者は馬鹿を見る」

「嘘つく人はよく喋る」

「この世で一番恐いことは無知ということ」

最後の言葉には痛感させられました。

いい歳をして世間知らずな僕。

とても情けなく穴があつたら入りたい心境です。

最後の最後の「……………終わり……………なのですか？」と書
きました。

これはもしかしたら・告訴の方で展開があるかもしれない（本当はそれもないと思うてる）ので書いただけでして。
深い意味はないです。

後日談として・・・昨日の話ですが。

元社員と会いました。

そのビルのことを聞いてみようかと思ったのです。
何か希望が出るかもしれないと期待してましたが。進むような話は全く得られなかったです。

よかったことと言えば。

これをシリーズ化したおかげでアクセス数も伸びてくれて読者も増えたことですかね。

当面の目標はせっかくのこの壮大なストーリー！。

色々その他の登録ブログに手を加えて掲載してみようと計画してます。
完全版「怪しき会社」として、どこかのブログで新しい読者がついてくれればと・・・。

いつか怪しき会社の本当の社名が言えるその日まで。

これからよろしくお付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0385b/>

怪しき会社

2010年10月9日19時12分発行